外務省·国際移住機関(IOM)共催

目黒区・財団法人自治体国際化協会(クレア)後援

平成 25 年度

「外国人の受入れと社会統合のための

国際ワークショップ」

若手外国人とともに歩む ~次世代に向けた挑戦~

2014年2月21日

外務省

国際移住機関(IOM)

目黒区

財団法人自治体国際化協会(クレア)

この冊子は、2014年2月21日、外務省が、国際移住機関(IOM)と 共催し、目黒区及び財団法人自治体国際化協会(クレア)の後援のもと開催し た平成25年度「外国人の受入れと社会統合のための国際ワークショップ~若 手外国人とともに歩む~次世代に向けた挑戦~」の概要と評価、登壇者の発言 内容及び配布資料をまとめたものです。

今回の国際ワークショップでは、欧州の多文化共生の第一人者から欧州の経験に基づく有益な提言があったのに続き、2人の若手外国人から体験談が述べられ大きな感動を呼びました。その後、報道、教育、在日外国人、企業といった各界のパネリストにより、(1)教育の問題、(2)多様性の受け止め方、(3)次世代の外国人の課題の3点を中心に活発な議論が行われました。

会場には、内外の有識者、在京外交団や一般市民を含め約200名の方に参加いただき、若手外国人との共生に向けて、様々な課題に関する認識や多様な意見を共有することができました。

今回の国際ワークショップの動画は「YouTube」(外務省動画チャンネル)に掲載されているほか、これまでの国際ワークショップに係る資料は、外務省ホームページ及びIOM駐日事務所ホームページに掲載されていますので、是非御覧ください。

●外務省ホームページ

www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/local/symbiosis/index.html

● I O M駐日事務所ホームページ

www.iomjapan.org/publication/jointworkshop.cfm

平成26年3月 外務省領事局外国人課

目 次

Ι	概要と評価	
	(日本語)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	• 9
	(英 語)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1 1
П	プログラム	
	(日本語)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1 7
	(英 語)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	19
Ш	登壇者紹介	
	写真・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2 3
	略歴	
	(日本語)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2 6
	(英 語)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2 9
IV	開会の辞	
	石原 宏高(外務大臣政務官)・・・・・・・・・・・・・・・・	3 5
V	基調講演	
	ウィリアム・レイシー・スウィング(IOM事務局長)・・・・・・	3 9
VI	外国有識者によるプレゼンテーション(発言内容、資料)・・・・・	4 9
	ハン・アンツィンガー(オランダ・エラスムス大学教授)	
VII	若手外国人による体験談	
	・福田 愛(帝京大学医学部附属病院看護師)・・・・・・・・・	7 1
	・伊木 ロドリゴ(愛知県豊田市立保見中学校教員)・・・・・・	7 5

VIII	パネル・ディスカッション
	<パネリスト発言要旨>
	小島 祥美・・・・・・・・・・・・・・・・・・・81
	(愛知淑徳大学文学部教育学科准教授)
	若林 秀樹・・・・・・・・・・・・・・・・・・82
	(宇都宮大学国際学部国際社会学科)
	マリアン・ジョセリン・ティロル・イグナシオ・・・・・・・84
	(在日フィリピン大使館公使兼総領事)
	アルベルト 松本・・・・・・・・・・・・・・86
	(合資会社イデア・ネットワーク代表)
	大隅 聖子・・・・・・・・・・・・・・・・・・88
	(株式会社ローソン理事執行役員,
	ヒューマンリソースステーションディレクター補佐)
	<パネリスト資料>
	小島 祥美・・・・・・・・・・・・・・・・・・89
	若林 秀樹・・・・・・・・・・・・・・・・・・・93
IX	閉会の辞
	三好 真理(外務省領事局長)・・・・・・・・・・・・・99
X	統計資料
	(日本語)
	(英 語)

I 概要と評価

外国人の受入れと社会統合のための国際ワークショップ 「若手外国人とともに歩む〜次世代に向けた挑戦〜」 概要と評価

平成26年2月25日 外務省領事局外国人課

2月21日,外務省は、国際移住機関(IOM)との共催により、目黒区及び財団法人自治体国際化協会(クレア)の後援の下、めぐろパーシモンホールにおいて、標記ワークショップを開催した(内外の有識者、在京外交団や一般市民を含め約200名が参加)。本ワークショップでは、冒頭、石原宏高外務大臣政務官が開会の挨拶を行い、スウィングIOM事務局長が基調講演を行ったほか、アンツィンガー・エラスムス大学(オランダ)教授による欧州の経験に基づく社会統合のための提言、韓国及びブラジル出身の若手外国人による体験に基づいたプレゼンテーションに続き、パネルディスカッションでは活発な議論が展開されたところ、概要と評価は以下のとおり。

1. ワークショップの概要と評価

- (1) 今回のワークショップでは、欧州の多文化共生の第一人者から欧州の有益な事例紹介があったのに続き、10代で来日し、日本語修得や進学、就職、病気など様々な問題を克服し、自分の夢を実現した2名の若手外国人(韓国籍の看護師及びブラジル国籍の中学教師)から体験談が述べられ、参加者から大きな感動と評価を得た。その後、(ア)教育の問題、(イ)多様性の受け止め方、(ウ)次世代の外国人の課題の3点を中心に、報道、教育、在日外国人、企業といった各界のパネリストによる議論が行われた。
- (2) グローバル化,少子高齢化が進む日本の成長を促すためには,外国人の力を活用することが必要不可欠となっている。そのためには,当事者である外国人側の努力のみならず,日本人側も多様な価値観を持った外国人をどのように受け入れ,それを如何に日本の成長につなげていくかが鍵となる。本ワークショップではそのような問題を初めて取り上げ,若手外国人との共生に向けて様々な課題に関する認識を共有し,同問題の重要性とともに多様な意見を発信できたことは,外国人材の活用が議論されている時だけに時宜にかなったものであり,有意義であった。
- 2. パネルディスカッションにおけるパネリスト意見及び議長総括(議長:山田伸二・日本放送協会(NHK)解説委員)
- (1)日本語教育の現場においてボランティア任せになっている現状を変える 必要がある。日本語能力に関係なく学年齢に合わせた児童・生徒の扱いや外 国人児童・生徒に対する就学義務を課す等の法的制度の確立が必要である。
- (2) 外国人を通して、日本人は新しい豊かな意識や物の考え方を新たに高められる格好の機会を与えられた。教育の意識改革を通じて社会統合に貢献したい。
- (3) 在日の若手フィリピン人は、コミュニティが組織化されていないため、 教育や言語の面で問題がある。そのため、在日若手フィリピン人に対して

個別カウンセリングを行っている。

- (4)人の移動には高度人材、建設労働者、日系人等様々な層の移動がある。 そのような外国人が日本社会にとどまり、日本の適切なリソースとなったと きに初めて社会統合が達成されると考える。日本のリソースとして如何に外 国人を活用するかが鍵である。
- (5) 「多様性」を重視し外国人留学生を多く採用したところ、企業の環境改革に大きく貢献した。外国人社員が組織の意思決定に参加できる管理職に登用されることによって、長時間労働、古い風習、女性の活躍の場など日本企業において長年解決できなかったことが、一瞬にして解決される可能性を秘めている。
- (6) こうした議論を踏まえ、議長より次のとおり総括があった。①日本社会が多様性を認めることは、マイノリティー(女性、高齢者、障がい者)の存在を認めることであり、これは外国人にとっても住みやすい社会を作るということにつながる、②在日の2世、3世の若手外国人が頑張って成功すれば、日本社会のパワーも倍増する、③欧州ではかつて移民排斥運動が起こった。これは他人事ではない。日本人も過去の歴史を勉強する必要がある。(了)

International Workshop on Acceptance of Foreign Nationals and their Integration into Japan: Advance together with Young Foreign Nationals – Challenge for Future Generations (Overview and Evaluation)

Foreign Nationals' Affairs Division, Consular Affairs Bureau Ministry of Foreign Affairs of Japan February 25, 2014

The Ministry of Foreign Affairs of Japan held an International Workshop on Acceptance of Foreign Nationals and their Integration into Japan at the Meguro Persimmon Hall on February 21, jointly with the International Organization for Migration (IOM) under the sponsorship of Meguro City and the Council of Local Authorities for International Relations (CLAIR). Approximately 200 people attend the workshop, including Japanese and foreign intellectuals, members of diplomatic corps in Japan as well as general citizens. Mr. Hirotaka Ishihara, Parliamentary Vice Minister for Foreign Affairs, made opening remarks and Ambassador William Lacy Swing, Director-General of the IOM, delivered the keynote speech. Following the presentation by Prof. Dr. Han Entzinger of Erasmus University, Netherland, for the social integration of foreign nationals based on Europe's experience and presentations by young foreign nationals from South Korea and Brazil, based on their own experience, participants actively exchanged their views in the panel discussion. An overview and the evaluation of the workshop are as follows:

1. Workshop Overview and Evaluation

- (1) In the workshop, European multicultural experts introduced useful European examples. Following that, two young foreign nationals, a South Korean nurse and a Brazilian junior high school teacher, who came to Japan in their teens and achieved their dreams, talked about their own experiences of having overcome various challenges such as mastering of Japanese language, going to university, employment as well as disease which impressed deeply the audience. The panelists from various sectors such as media, education, foreign nationals, and business exchanged views on (a) educational problems, (b) how to accept diversity and (c) challenges the next-generation foreign nationals face in Japan.
- (2) In order to encourage growth in Japan under globalization as well as declining birth rate and aging population, it is essential to tap the energy of foreign nationals. For that purpose, how to accept foreign nationals with diverse values and how to accommodate this to Japan's growth is the key along with the efforts of foreign nationals. Taking up this issue for the first time, the workshop recognized various challenges that need to be

dealt with for coexistence with young foreign nationals and introduced a variety of views together with the significance of this issue. Considering the ongoing discussion of how to utilize the foreign nationals in Japan, the workshop proved timely and meaningful.

- 2. Panelists' views and Chairman's Summary (Chairman: Mr. Shinji Yamada, executive commentator, Japan Broadcasting Corporation (NHK))
 - (1) It is necessary to change the current situation in which Japanese language education for foreign nationals is left to volunteers. Foreign pupils and students need to be dealt with according to their school ages, irrespective of their Japanese skills. Further, legal system needs to be set up to oblige foreign pupils and students to go to school.
 - (2) The Japanese have a good opportunity for new, rich feelings and to enhance their ways of thinking thanks to foreign nationals. I would like to contribute to the integration of foreign nationals by improving the way of thinking in education.
 - (3) With no Philippine community organized in Japan, young Filipinos in the country have problems with education and language. I am therefore providing individual counseling with young Filipino residents.
 - (4) There are many layers in movements of people, including people with advanced knowledge, construction workers and Japanese descendants. I believe social integration will be achieved only when these foreign nationals remain in Japanese society and become an important resource for Japan. The key is how to utilize foreign nationals as a resource for Japan.
 - (5) We employed many foreign students studying in Japan considering the importance of "diversity", which contributed greatly to improving the company's environment. By promoting foreign employees to managerial positions and allowing them to participate in corporate decision-making, problems that Japanese businesses have long been struggling to overcome such as long overtime work, old traditions and the lack of active participation of women could be rapidly resolved.
 - (6) The chairman summarized the discussion as follows: (1) accepting diversity in Japanese society means accepting the existence of minorities (including women, the elderly and disabled), which in turn leads to the creation of a society comfortable to live in for foreign nationals; (2) the success of young second- and third-generation foreign residents in Japan can redouble the power of Japanese society; and (3) there

have been anti-immigrant movements in Europe, which could happen in Japan. The Japanese as well need to learn from the past history.

(End)

Ⅱ プログラム

平成25年度

外国人の受入れと社会統合のための 国際ワークショップ

「若手外国人とともに歩む~次世代に向けた挑戦~」

日 時 2014年2月21日(金)13:30-17:00(開場12:30)

会場 めぐろパーシモンホール (東京都目黒区八雲 1-1-1)

主催 外務省・国際移住機関(IOM)

後 援 目黒区 財団法人自治体国際化協会(クレア)

国際的なグローバル化が進み,我が国では人口減少・少子高齢化が進む中,日本の成長を促すには,外国人の活力を活用することが今や不可欠と言えます。政府が進める日本再興戦略では,観光立国推進の観点からビザ緩和を通じた外国人観光客の呼込みや高度外国人材の導入を図り,日本の成長を促進しようとしています。

他方,日本社会に目を向ければ、社会に適合し、一定の貢献を行っている外国出身の若者がいる一方,日本社会に馴染めず教育現場からドロップアウトし、犯罪に走る若者がいるのも確かです。

そのような中,今から若手の優良な外国人を適切な形で日本社会と統合していくことができれば,地方の振興を含めた日本全体の成長,治安を含む社会の安定,そして外国との外交関係にも寄与することは,明らかです。

以上を踏まえ、本ワークショップでは、「若手外国人とともに歩む~次世代に向けた挑戦~」をサブ・テーマとして、以下の3点に絞って議論します。

- 言葉の問題(日本語と母語)と国際協力
- 地域におけるコミュニティの役割
- 日本企業の役割

本ワークショップへの参加をご希望の方は、以下の要領で申込みください。皆様のご参加をお待ちしています。

プログラム (発) 8・類時趣能 以下敬称

13:30 司会による進行方法の説明

13:35 開会の辞

石原宏高(外務大臣政務官)(予定)

13:40 基調講演

ウィリアム・レイシー・スウィング (国際移住機関(IOM)事務局長)

13:55 休憩

14:10 外国有識者によるプレゼンテーション

ハン・アンツィンガー (オランダ・エラスムス大学教授)

14:30 体験談A

福田愛(帝京大学医学部附属病院看護師)

14:45 体験談 B

伊木ロドリゴ(愛知県豊田市立保見中学校教員)

15:00 休憩

15:20 パネル・ディスカッション

議長:山田伸二(日本放送協会(NHK)解説委員) パネリスト:

アルベルト松本

(合資会社イデア・ネットワーク代表) 大隅聖子(株式会社ローソン理事執行役員 ヒューマンリソースステーションディレクター補佐) 小島祥美(愛知淑徳大学文学部教育学科准教授) マリアン・ジョセリン・ティロル・イグナシオ (在日フィリピン大使館公使兼総領事) 若林秀樹(宇都宮大学国際学部特任准教授)

16:50 閉会の辞

三好真理(外務省領事局長)

17:00 終了

会場へのアクセス

会場 めぐろパーシモンホール(小ホール地下 1 階) 所在地 東京都目黒区八雲 1-1-1



※ご来場の際は、公共交通機関をご利用ください。

交通案内:

【電車】

- 渋谷方面より【所要時間:約10分】 東急東横線:渋谷駅(各停)→都立大学駅
- 横浜方面より【所要時間:約20分】東急東横線:横浜 駅(特急)→自由が丘駅(各停)→都立大学駅

【バス】

東急バス【めぐろ区民キャンパス】バス停を下車して すぐ

- 渋谷駅方面より【渋 34】渋谷駅→東京医療センター
- 多摩川駅方面より【多摩 01】多摩川駅→東京医療セン ター
- 目黒駅方面より【黒 07】目黒駅→弦巻営業所
- 成城学園前駅方面より【都立 01】成城学園前駅→都立 大学駅北口
- ホールまでの行き方 -

東急東横線の都立大学駅改札を出て左へ数メートル歩くと目黒通りに出ます。そのまま約300メートル直進すると、左手にめぐろ区民キャンパスが見えます。ホールはそのキャンパス内にあります。

参加申込み 申込期限 2014年2月14日(金)

参加ご希望の方は、以下の IOM 駐日事務所ウェブサイトから申し込みください。

申込先ウェブサイト→

http://www.iomjapan.org/event/workshop_Feb2014.cfm

- ※本ワークショップは**事前申込み制**とさせていただきます。事前申込みをされていない方はご入場できませんので、予めご了承ください。
- ※申込みの際にご記入いただきました個人情報は、適切に管理し、本ワークショップの運営のためにのみ使用します。
- ※申込みを受け付けた旨の連絡はしておりませんので、予めご了承ください。
- ※会場の座席に制限がありますので、申込みをされても参加できない場合があります。その際は、同事務所から で連絡しますので、で了承ください。

ワークショップに関するお問い合わせ



国際移住機関(IOM)駐日事務所

Tel. 03-3595-2487 (土日・祝日を除く 10:00 ~ 12:30, 13:30 ~ 18:00) http://www.iomjapan.org(右上「お問い合わせ」より)

★会場へのアクセスに関するお問い合わせは、めぐろパーシモンホールまでお願いします。 Tel: 03-5701-2924

FY2013 INTERNATIONAL WORKSHOP ON ACCEPTANCE OF FOREIGN NATIONALS AND THEIR INTEGRATION INTO JAPAN:

- Advance together with Young Foreign Nationals - Challenge for Future Generations -

Time and Date: 13:30 - 17:00, Friday, 21 February 2014 (doors open at 12:30) **Venue:** Meguro Persimmon Hall (address: 1-1-1, Yakumo, Meguro-ku, Tokyo)

Organisers: Ministry of Foreign Affairs (MOFA), International Organization for Migration (IOM)

Supporters: Meguro City, Council of Local Authorities for International Relations (CLAIR)

Overview

With international globalization and a society with declining birthrate and aging population, it is indispensable for Japan to utilize skills and talents of foreign nationals in order to promote the growth of the Japanese economy. The government is promoting growth under the "Japan Revitalization Strategy" by increasing the number of foreign tourists to Japan by relaxing visa requirements and promoting the country as a tourism destination, as well as by accepting highly skilled foreign professionals to Japan.

Looking at foreign nationals already residing in the country, particularly young people, it is certain that some have successfully adapted to their Japanese communities and contribute to the economy while others struggle to integrate, with some dropping out of school or becoming involved in criminal activity.

If young foreign nationals' integration into the Japanese society facilitated, it would certainly contribute not only to the economic growth of Japan including the promotion of local economies and a safe and secure society, but it would also foster strong diplomatic relations with other countries.

The workshop will discuss the following three issues under the overall theme of 'advance together with young foreign nationals – challenge for future generations':

- Language (Japanese and mother tongue) and international cooperation;
- Role of communities in local areas; and
- Role of Japanese business sector

Programme * English-Japanese simultaneous interpretation provided

- 13:30 Introduction
- 13:35 Opening Remarks by Mr. Hirotaka ISHIHARA, Parliamentary Vice-Minister for Foreign Affairs (TBC)
- 13:40 Keynote Speech by Amb. William Lacy SWING, Director-General of IOM
- (13:55 15 min. break)
- 14:10 Presentation by a guest foreign expert

Prof. Dr. Han Entzinger, Department of Sociology, Erasmus University Rotterdam

14:30 Case study A: Presentation by

Ms. Ai FUKUDA, nurse, Teikyo University Hospital

14:45 Case study B: Presentation by

Mr. Rodrigo IGI, teacher, Homi Junior High School, Toyota City, Aichi Prefecture

(15:00 20 min. break)

15:20 Panel Discussion (including Q&A)

Chair: Mr. Shinji YAMADA, Executive Commentator, Japan Broadcasting Corporation (NHK) Panelists:

Mr. Alberto MATSUMOTO, CEO, IDEA Network Consulting

Ms. Seiko OSUMI, Deputy Senior Vice President and Deputy Division Director, Human Resources Office, Lawson, Inc.

Ms. Yoshimi KOJIMA, Associate Professor of Depertment of Education, Aichi Shukutoku University

Ms. Marian Jocelyn R. TIROL-IGNACIO, Minister and Consul-General, the Embassy of the Philippines in Japan

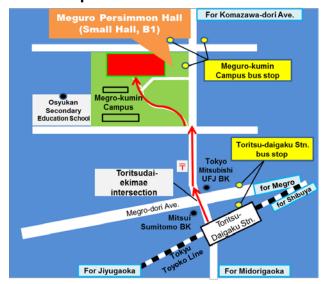
Mr. Hideki WAKABAYASHI, Associate Professor of Faculty of International, Utsunomiya University

16:50 Closing Remarks

Ms. Mari MIYOSHI, Director-General, Consular Affairs Bureau, MOFA

17:00 End

Workshop venue



Meguro Persimmon Hall (Small Hall,B1)

(address: 1-1-1, Yakumo, Meguro-ku, Tokyo)

Access:

[By train]

- 10 minutes from Shibuya station: Tokyu Toyoko Line: Shibuya (local) → Toritsu Daigaku Station
- 20 minutes from Yokohama station: Tokyu Toyoko Line: Yokohama (limited express) → Jiyuugaoka (local) → Toritsu Daigaku station

[By bus]

Tokyu bus : please get off at Meguro Kumin Campus

- From Shibuya: Shibuya station<渋34> → Tokyo Iryou Center
- From Tamagawa: Tamagawa station<多摩01> → Tokyo Iryou Center
- From Meguro: Meguro station<黒07> → Tsurumaki Eigyosho
- From Sheijogakuen: Seijogakuen mae station ightarrow Toritsu Daigaku Eki Kitaguchi

Access to the hall

From the Toritsu-daigaku Station please turn left and go straight to Meguro-dori Ave. which is a few meters away from the station, cross the Toritsudai-ekimae intersection and go straight about three hundred meters. You will see "Meguro-kumin Campus" on your left. The Meguro Persimmon Hall is in the Campus.

Registration deadline by Friday, 14 February 2014

To attend this workshop, please register at the following webpage:

http://www.iomjapan.org/event/workshop_Feb2014_e.cfm

- <u>Advanced registration is required for attending the workshop</u>. Those without advanced registration will not be admitted to the workshop.
- Personal data submitted to the secretariat shall be properly administered and used exclusively for the purpose of the management of the workshop.
- The secretariat will <u>not</u> send emails, fax, etc. to confirm the receipt of registration.
- The registrants will be notified by the secretariat in case they are not able to attend the workshop because of limited seating.

For general inquiries:

International Organization for Migration (IOM)
Online inquiry form:
http://www.iomjapan.org/infolib/infomation_form.cfm

Tel: 03-3595-2487 10:00-12:30, 13:30-18:00 (except on Sat, Sun & holidays)

For inquiries on the venue:

Meguro Persimmon Hall Tel: 03-5701-2924

^{*} Please use public transportation to travel to the venue.

Ⅲ 登壇者紹介

登壇者紹介

<主催者>



石原宏高 外務大臣政務官



三好真理 外務省領事局長



ウィリアム・レイシー・スウィング 国際移住機関(IOM)事務局長

<外国人有識者>



ハン・アンツィンガー オランダ・エラスムス大学教授

<体験談発表>



福田愛 帝京大学医学部附属病院 看護師



伊木ロドリゴ 豊田市立保見中学校 教員

<パネル・ディスカッション議長>



山田伸二 日本放送協会(NHK)解説委員

<パネリスト>



アルベルト松本 合資会社イデア・ネットワーク 代表



大隅聖子 (株)ローソン理事執行役員 ヒューマンリソースステーション ディレクター補佐



小島祥美 愛知淑徳大学文学部教育学科 准教授



マリアン・ジョセリン・ティロル・イグナシオ 在日フィリピン大使館 公使兼総領事



若林秀樹 宇都宮大学国際学部 特任准教授

く集合写真>



<2月20日 事前視察>

目黒区立東根小学校 (日本語国際学級)



中野区国際交流協会



登壇者略歴(敬称略)

【主催】

石原 宏高(外務大臣政務官)

1988 年, 慶応大学経済学部卒業。同年, 日本興業銀行入行。ニューヨーク支店, バンコク支店にて調査役, みずほフィナンシャルグループ戦略第2部参事役。2003 年, 同行退職。2005 年, 衆議院議員総選挙で初当選, 財務金融委員会, 国際テロ・イラク特別委員会委員, 党国際局次長, 青年局次長, 国会対策委員会委員。2012 年, 衆議院議員総選挙で二期目の当選, 経済産業委員会理事, 倫理・選挙特別委員会理事。2013 年 9 月, 外務大臣政務官(第 2 次安倍内閣)。

三好 真理(外務省領事局長)

1980年,東京大学法学部卒業。同年,外務省採用。1995年,外務省経済協力局政策課企画官。1996年,外務省総合外交政策局総務課企画官。1998年,外務省大臣官房領事移住部(現在の領事局)旅券課長。2000年,在ドイツ日本国大使館参事官。2002年,外務省大臣官房領事移住部政策課長。2004年,法務省入国管理局登録管理官。2006年,国際連合日本政府代表部公使。2008年,在ドイツ日本国大使館公使。2012年,法務省仙台入国管理局長。2013年1月より現職。

ウィリアム・レイシー・スウィング(国際移住機関(IOM)事務局長)

米国国務省在職中に6カ国の大使を歴任し、大規模在外公館の運営及び人道開発支援を統括。グローバルな人の移動の諸問題について深い造詣を持つ。西サハラで国連事務総長特別代表(SRSG)を務めた後、2003年から2008年まで再びSRSGとして、史上最大規模の国連PKOである国連コンゴ民主共和国ミッション(MONUC)を統率。2008年より現職。2013年6月に、2期目(5年間)に再選された。

【外国人有識者】

ハン・アンツィンガー(オランダ・エラスムス大学教授)

専門は移民・社会統合の研究。国際的移民・社会統合・多文化主義に関して幅広く著書を出版。同問題に関して従来から地方公共団体、政府機関及び国際機関に対して様々な助言を与えてきた。欧州の移民に関する研究機関のネットワークである IMISCOE (International Migration, Integration and Social Cohesion in Europe)の代表, the Research Committee on Migration of the International Sociological Association の前代表を務める。

【体験談発表者】

福田 愛(帝京大学医学部附属病院看護師)

2002年,来日。2010年,看護学部を卒業し,現在,帝京大学医学部附属病院に勤務中。

伊木 ロドリゴ(愛知県豊田市立保見中学校教員)

ブラジル・サンパウロ州生まれ。1996年に来日して以来日本の教育を受ける。 2006年、愛知県立大学入学。同年、愛知県主催の愛知県青年大使の団長としてオーストラリア・ビクトリア州にて多文化共生社会を視察。2007年2月に弟とともに日本語教室「FERA idiomas」を開校。2008年、日本学生支援機構(JASSO)より優秀学生顕彰(社会貢献分野)を受賞。自分の体験を伝えるために愛知県内外から講演の依頼を受けるようになる。教員採用試験を経て、2010年より保見中学校の教壇に立つ。

【パネル・ディスカッション議長】

山田 伸二(日本放送協会(NHK)解説委員)

1973年, 一橋大学社会学部卒業。1973年, NHKに入社。金沢放送局・大阪放送局を経て報道局経済部の記者, デスク。1994年より現職。この間, 衛星放送「東京マーケット情報」キャスター, 衛星放送「ジャパン・ビジネス・トゥディ」編集長, アメリカ・コロンビア大学客員研究員。2008年より明治大学政経学部・特任教授を兼任。

【パネリスト】

アルベルト 松本(合資会社イデア・ネットワーク代表)

アルゼンチン日系二世。国費留学生,横浜国立大学大学院で法律(経済関係法専攻)の修士号を取得。1997年に渉外法務専門の翻訳会社を設立。法廷通訳,放送通訳、スペイン語講師(神奈川大学,静岡県立大学)。各地で外国人労働者問題及び多文化共生相談員研修会の講師も行い,在日ラテンコミュニティの「Mercado Latino 誌」及び「Latin-a 誌」の専属コラムニスト。また,全米日系博物館「ディスカバーニッケイ」のコラムニスト及びコンサルタントでもある。公益財団法人海外日系人協会の評議員。日本在歴 23年。

大隅 聖子(株式会社ローソン理事執行役員, ヒューマンリソースステーションディレクター補佐)

1989 年, リクルート入社。2006 年よりローソン。おもに店舗開発(新規FCオーナーの開拓)を担当。2009 年には開発本部本部長補佐として, 多店舗経営オーナー(マネジメントオーナー)制度を構築。その後, 法人営業本部を経て, 2012 年 4 月から現職。ダイバーシティを推進。

小島 祥美(愛知淑徳大学文学部教育学科准教授)

公立小学校教員時の外国人児童との出会いから, 南米・バックパッカー, 阪神淡路大震災後の外国人支援やコミュニティビジネス参画, 再度の大学進学等(国際協力専攻)を経て, 岐阜県可児市へ転居して行政・NPO 等と協働による全国初の外国人就学実態調査を実施。その結果, 同市で「不就学ゼロ」施策が開始され, 初代外国人児童生徒コーディネーターとなる。2006 年 9 月より愛知淑徳大学に赴任, 2011 年 4 月より現職。人間科学博士(大阪大学大学院)。

マリアン・ジョセリン・ティロル・イグナシオ(在日フィリピン大使館公使兼総領事) フィリピン大学及びオックスフォード大学卒業。1996年、フィリピン外務省入省。外

務本省及び在スウェーデン・フィリピン大使館等での勤務を経て, 2012 年 3 月より現職。1997 年, カンボジアにおいて武力衝突が発生した際には, フィリピンの女性外交官として初めて, 在留フィリピン人の国外退避活動に従事。

若林 秀樹(宇都宮大学国際学部特任准教授)

1986年,文教大学教育学部卒業。1986年4月~2010年3月,栃木県公立中学校教員(1986~1991旧・石橋町立石橋中学校,1991~1998小山市立桑中学校,1998~2008小山市立小山第三中学校,2008~2010小山市立小山城南中学校)。2008年~2010年,宇都宮大学非常勤講師(ポルトガル語)。2010年3月に中学校を退職し4月より現職。1997年~2013年栃木県警民間通訳人。

PROFILES

[Co-organizers]

Mr. Hirotaka ISHIHARA, Parliamentary Vice-Minister for Foreign Affairs

Graduated from the Faculty of Economics at Keio University and joined the Industrial Bank of Japan (IBJ), Ltd. in 1988. Worked at the New York and Bangkok branches of the IBJ, as well as in Strategic Division II of the Mizuho Financial Group, Inc. Resigned from Mizuho Financial Group, Inc. in 2003. Elected to the House of Representatives for the first time in 2005 and served on the Committee on Financial Affairs of the House of Representatives, on the Special Committee on Prevention of International Terrorism and Japan's Cooperation and Support; Humanitarian Assistance for Reconstruction in Iraq of the House of Representatives, as the Deputy Director-General of the LDP's International Bureau, Deputy Director of the LDP's Youth Division and on the LDP's Diet Affairs Committee in 2005. Re-elected to the House of Representatives for a second term in 2012 and served as the Director of the Committee on Economy, Trade and Industry of the House of Representatives and Director of the Special Committee on Political Ethics and Election Law in the House of Representatives. Appointed as the Parliamentary Vice-Minister for Foreign Affairs in the 2nd Abe Cabinet in September 2013.

Ms. Mari MIYOSHI, Director-General of the Consular Affairs Bureau, Ministry of Foreign Affairs

Graduated from the Faculty of Law at Tokyo University in 1980, and entered the MOFA in the same year. Served as the Senior Assistant in the Aid Policy Division, Economic Cooperation Bureau in 1995, Senior Assistant in the U.N. Administration Division, Foreign Policy Bureau in 1996, Director of the Passport Division, Consular and Migration Affairs Department in 1998, Counselor at the Embassy of Japan in Germany in 2000, Director of the Consular and Migration Policy Division and Consular and Migration Affairs Department in 2002, Director of the Registration Division, Immigration Bureau, Ministry of Justice in 2004, Minister of the Permanent Mission of Japan to the U.N. in New York in 2006, Minister at the Embassy of Japan in Germany in 2008, Director-General of the Sendai (TOHOKU Region) Immigration Bureau, Ministry of Justice in 2012, and most recently, Director-General of the Consular Affairs Bureau, Ministry of Foreign Affairs in January 2014.

Amb. William Lacy SWING, Director General of International Organization for Migration (IOM)

Six postings as ambassador during his diplomatic career at the United States Department of State, managing some of the largest diplomatic missions and foreign development and humanitarian aid programmes, he has deep understanding of multiple factors affecting international migration. From 2003 till 2008, as UN Special Representative of the Secretary-General (SRSG) for the Democratic Republic of the Congo, he successfully led the largest UN Peacekeeping Operations Mission in history, prior to which he served as the SRSG for Western Sahara. He assumed his current post in 2008, and was re-elected in June 2013 for his second five-year term.

[International Expert]

Prof. dr. Han Entzinger, Department of Sociology, Erasmus University Rotterdam

Han Entzinger is Professor of Migration and Integration Studies at Erasmus University Rotterdam, the Netherlands. He has published extensively on international migration, integration and multiculturalism. He has consulted local and national governments and international organisations on these issues. He is the president of the IMISCOE network of European research institutes on migration and the former president of the Research Committee on Migration of the International Sociological Association.

[Case study: Presenters]

Ms. AI FUKUDA, nurse, Teikyo University Hospital

Came to Japan in 2002, Graduated from Faculty of Nursing 2010. She is works at Teikyo University Hospital in 2010.

Mr. Rodrigo IGI, Teacher, Homi JHS, Toyota-city, Aichi – prefecture

Born in Sao Paulo, Brazil. Arrived in Japan in 1986. Entered Aichi Prefectural University in 2006. In the same year, visited Victoria, Australia as the leader of the AYA–Aichi Youth Ambassadors to learn about the multiculturalism there. In February 2007, started a Japanese language school, "FERA idiomas" with his younger brother. In 2008, was chosen as the Student of the year "Social-Contribution Award" by JASSO-Japan Student Services Organization. Has been invited to give speeches in and out of Aichi prefecture to tell his experiences. Succeeded in passing the teacher's employment examination and

started teaching at Homi JHS in 2010.

[Chair of Panel Discussion]

Mr. Shinji YAMADA, Japan Broadcasting Corporation Executive Commentator

Mr. Yamada graduated from the Faculty of Sociology at Hitotsubashi University in 1973, and joined the Japan Broadcasting Corporation (NHK) the same year. He served at the Kanazawa and Osaka broadcasting stations as a reporter and at the press bureau's economic division desk. Yamada assumed his current post in 1994, and has since been a newscaster for the satellite broadcast, "Tokyo Market Information," chief editor of the satellite broadcast, "Japan Business Today," and a visiting fellow at Columbia University in the United States. Since 2008, he has also served as a professor in the Faculty of Politics and Economics at Meiji University.

[Panelists]

Mr. Alberto MATSUMOTO, CEO, IDEA Network Consulting

Mr. Matsumoto was born in Argentina and moved to Japan in 1990. He wears a multiple hat, including Founding CEO of Idea Network Consulting, Spanish Lecturer at Kanagawa University and University of Shizuoka, Judicial Interpreter at Tokyo & Yokohama Court, JANM(Japanese American National Museum) "Discover Nikkei Programme" Consultant & Columnist, Mercado Latino & Latin-a Magazine's Columnist, and Abroad Councilor for the Association of Nikkei & Japanese.

Ms. Seiko Osumi, Deputy Senior Vice President, Deputy Division Director, Human Resources Office, Lawson,Inc.

Joined Recruit Holdings Co., Ltd. in 1989. In 2006, she he moved to Lawson, Inc. as a Senior Manager of Area & Store Development Department. In 2009, she was promoted to be the Deputy Division Director, where she established "Management Owner (MO)" system to support franchise owners who have entrepreneurial spirit and deep understanding of local communities. She then held responsible positions in the Corporate Sales Department, and she was promoted to be the Deputy Senior Vice President in March 2012. She was appointed to her current position in the Human Resources Office in April 2012, and is currently in charge of diversity management in the company.

Ms. Yoshimi KOJIMA, Associate Professor, Department of Education in the Faculty of Literature, Aichi Shukutoku University

Originally an elementary school educator, Ms. Kojima was inspired by her experiences with foreign national children to broaden her horizons, backpacking through South America, assisting foreign residents after the Hanshin Awaji Earthquake, participating in community business promotion, and eventually pursuing further academic training (focus: international cooperation). Upon completion of her studies, she moved to Kani City in Gifu Prefecture and, in cooperation with government bodies, NPOs, etc., she coordinated the first-ever field study on school attendance among foreign nationals in the nation. As a result of her work, the city enacted a "0 Truancy" measure, and she became the first Foreign National Student Coordinator. In September 2006, she accepted a position at Aichi Shukutoku University and has been in her current position since April 2011. Doctorate in Human Sciences (Osaka University Graduate School)

Ms. Marian Jocelyn TIROL-IGNACIO, Minister and Consul-General, Embassy of the Philippines in Japan

Joined the Department of Foreign Affairs (DFA) in 1996. Prior to her assignment in Tokyo, the Consul General was Executive Director of the Office of the United Nations and Other International Organizations (UNIO) at the DFA. Mrs. Ignacio was also assigned to the Philippine Embassy in Stockholm. She is the first female Philippine Foreign Service Officer to take part in the evacuation of Filipino nationals during the war in Cambodia in 1997.

Mrs. Ignacio is a graduate of the University of the Philippines where she earned a Bachelor in Interior Design and AB Psychology. She is also a graduate of the University of Oxford's Foreign Service Program.

Mr. Hideki WAKABAYASHI, Associate Professor, International faculty of Utsunomiya University

Graduated from Faculty of Education, Bunkyo University in 1986. A teacher of Tochigi pref public junior high schools (1986-2010). 1st school was Ishibashi-JHS(1986-1991), 2nd school was Oyama Kuwa-JHS(1991-1998), 3rd school was Oyama Daisan-JHS(1998-2008),last school was Oyama Jonan-JHS(2008-2010). Part-time teacher of Utsunomiya University (2008-2010,Language of Portuguese). Assumed my current post in 2010. Civilian interpreter for Tochigi-pref Piloce(1997-2003).

IV 開会の辞

開会の辞

外務大臣政務官 石原宏高

皆様.こんにちは。外務大臣政務官の石原宏高でございます。

本日は御多忙の中,平成25年度「外国人の受入れと社会統合のための国際ワークショップ」に御参加いただきまして,誠にありがとうございます。本ワークショップの主催者を代表いたしまして,本日御参加をいただきました皆様方を心より歓迎申し上げます。

このワークショップは、前身のシンポジウムを含めますと、今回で10回目を迎えることができました。外国人の受入れや日本に在住する外国人が抱える様々な問題に焦点を当て、国民参加型の議論を提供する場としてかなり定着してきたものというふうに考えております。

さて、政府は、昨年6月、日本再興戦略を策定致しました。その中で、日本の力強い経済を取り戻すため、観光立国実現の取組の一つとして、ビザ発給要件の緩和が盛り込まれました。

外務省としては、昨年の日 ASEAN 友好協力40周年を契機にタイ、マレーシアに対するビザ免除、ベトナムなど数カ国に対する数次ビザの導入を実施致しました。その結果、これらビザ緩和を実施した ASEAN 諸国から訪日者数に著しい伸びが見られ、昨年12月には目標であった1千万人の訪日外国人数を初めて達成したところであります。

2020年には東京オリンピック・パラリンピックが開催されます。政府としても、これを好機として、日本の魅力をアピールし、訪日外国人者数2千万人を目指そうとしております。

また,国内に目を向ければ,皆様御存じのとおり,我が国は,人口減少と少子高齢化の急速な進展が現実のものとなり,この中で新たな経済成長に向けた取組が不可欠となっております。

このような状況から、外国人観光客の誘致にとどまらず、中長期的な視点で我が国の社会に活力をもたらす人材を国内外を問わず取り込んでいくことが日本にとって一層重要となって参りました。

その中で、在日外国人の受入れと社会統合の問題は息の長い課題であります。特に、今回テーマとして取り上げた「次世代を担う若手の外国人とともにいかに歩んでいけるか」が鍵であります。言葉といった教育の課題、地域や在日外国人のコミュニティの役割、企業の役割などいくつかの課題があると思います。また、同時にこれは、日本の若者にも当てはまることかもしれません。我々日本人や日本社会の課題は何なのかも考えていきたいというふうに考えております。

本日は、このような観点から、いかに優良な若手外国人の活力を、どのような形で日本社会と統合していくことが適切なのか、専門家の皆様から忌憚のない御意見や経験談をお話しいただき、課題と方向性を議論し、次世代に向け、我々が目指すべき外国人との共生社会についてのヒントが得られれば幸いであります。

最後になりましたが、本日のワークショップ開催のために御尽力を頂きましたパネル・ディスカッション議長である山田伸二(やまだ・しんじ)NHK解説委員、並びに、本ワークショップの共催者である国際移住機関のスウィング事務局長をはじめとする皆様、そして後援者である目黒区と財団法人自治体国際化協会の皆様に、改めてお礼を申し上げます。

本日のワークショップが実り多いものとなることを祈念し、開会に当たっての御挨拶 とさせていただきます。

本日はありがとうございます。

V 基調講演

KEYNOTE SPEECH

William Lacy Swing Director General of the International Organization for Migration

International Workshop on Acceptance of Foreign Nationals and their Integration into Japan: "Advance together with Young Foreign Nationals-Challenge for Future Generations"

Meguro Persimmon Hall Friday, 21 February 2014

Your Excellencies, Distinguished Delegates, Ladies and Gentlemen,

Introduction

It is a great honour for me to be able to visit Japan once again to take part in this workshop for the sixth time in as many years.

I have always been impressed and encouraged by this series of annual workshops; they present a unique opportunity to discuss migration issues openly and to strengthen cooperation among the Ministry of Foreign Affairs, local governments, scholars and intergovernmental organizations.

Congratulations to the workshop co-organizers for choosing such a timely and appropriate theme. "The social integration of migrant youth" demonstrates the extent to which the Government of Japan, the city of Meguro, and the Council of Local Authorities for International Relations are thinking far ahead, both in their view of migration as a positive force, and in their efforts to incorporate migration and migrants in policy and practice at all levels, starting from the local.

Scene-setter

We live in a world on the move. Numerically, there has never before been so much human mobility -1 billion persons in a 7 billion world. The 232 million international migrants constitute a population slightly smaller than that of Indonesia, and somewhat larger than the population of Brazil.

The thesis of my presentation is that increased international migration in our time is inevitable, necessary and desirable - if well governed. This thesis is especially pertinent with regard to youth migration, given massive youth unemployment in the Global South, on the one hand, and labor shortages in ageing societies of the Global North, including Japan.

The drivers of migration are several -- demography, labour demand, the digital revolution, distance-shrinking technology, natural and man-madedisasters, and the dreams of a better life. More and more people, therefore, will arrive on our shores and doorsteps who do not look like us or speak as we do, but -- if properly welcomed and given the opportunity to intregrate – can enrich our societies and economies through their contribution.

These migrants improve the lives of millions of others through their work, the circulation of ideas and skills, and-remittances. Migrants' remittances now total some \$450 billion, roughly equivalent to the GDP of Saudi Arabia or a medium-sized EU member state economy.

A 2012 McKinsey survey noted that employers worldwide could face a shortage of 40 million university educated workers by 2020. By mid-century, Europe alone will need tens of millions of workers; many other countries with ageing populations will face similar labor shortages, including Japan.

Japan is experiencing unusually rapid aging and a decreasing birth rate far below the replacement rate. The Health Ministry has estimated that, at this rate, Japan's population may shrink to less than 96 million by 2050.

It is clear that something needs to be done now -- not just in Japan, but in ageing countries throughout the world. Let's remind ourselves of some basic facts and figures that reveal the relevance of youth migration today.

There are an unprecedented number of international migrants -- 232 million -- and by mid-century the number is expected to double to about 450 million. Of these 232 million, almost half -- 100 million international migrants -- are considered to be youth. The number of young international migrants is rising along with the youth boom in many developing countries. Thirty-five million -- or 15% of all international migrants -- are below the age of 20 (not counting children born in host countries). Sixty-five million, or 28% of all international migrants are between the ages of 20 to 34.

Migration provides youth invaluable opportunities to expand their potential through study, work and cultural exchange abroad. Young migrants can contribute to the development of both destination and origin countries. Migrant youth facilitate the transfer of knowledge, technology, and human networking between and within countries. It is perhaps time to abandon the sterile debate about brain drain versus brain gain in favor of policies that facilitate brain circulation. Migrant youth represent part of the solution. An even more radical thought is perhaps in order – namely, that the very concept of migration is now out-of-date; it should be replaced with the concept of "human mobility."

Unfortunately, migrant youth are often socially marginalized, due to language, cultural, mobility and immigration status. We must all try to assist these individuals and groups to navigate complex challenges; develop leadership skills, and build confidence to contribute actively to their new communities and assume roles of greater responsibility in society.

Policies to integrate young foreign nationals are a mutually beneficial proposition.

Let's be frank – Japan, like all other ageing societies, is engaged in a heavy competition for global talent search.

1. Foreign Student Mobility and Integration

International student mobility is an important form of youth migration today; there are some two and a half million international students in OECD countries and the Russian Federation alone -- with increasing numbers in other non-English-speaking countries. Student mobility contributes to human resource development and capacity in countries of origin, and constitutes an important reserve of highly skilled workers for host countries. Indeed, Japan deserves recognition for the effective measures it has taken to attract foreign students and to encourage their subsequent integration into labour markets.

Global youth unemployment is one of the major issues of our time. It now stands at 15%, a disturbingly high global average. During times of economic crises, youth unemployment in host countries can foment xenophobic attitudes; make integration more difficult; and increase youth vulnerability. In particular, local youth can mistakenly believe that migrants are occupying their jobs -- when, in reality, migrant youth's legal status and lack of social connections often means that -- irrespective of their educational level -- they are relegated to low-skilled jobs within the informal sectors – a phenomenon we refer to as "de-skilling." Unfortunately, we also see that these xenophobic views in times of economic crises lead to perverse policy reactions – reactions that restrict labor markets; lead to mismatches between skills and demand; create further labor shortages; and increase youth labor vulnerability. Migrant youth are among the most vulnerable to these policy shortcomings, and there is an urgent need to address these challenges through effective

migration mechanisms and long-term integration measures designed specifically for migrant youth.

To overcome these challenges and reduce the vulnerabilities, international student mobility and youth employability can benefit from closer private sector partnerships. This is what IOM's International Recruitment Integrity System (IRIS) aims to do; we hope to create a voluntary partnership with companies and governments that see the urgent need to adopt pragmatic best practices to root out abusive and exploitative recruitment practices. Both youthful migrants and host societies will profit as a result of measures such as reinforcing the contributions of international student mobility, through on-the-job training, innovative and efficient job matching, as well as increased opportunities for cultural exchange.

2. Migrant Youth Integration is facilitated through access to Education

Another important segment of society related to migrant youth are 2nd and 3rd generation diaspora members, many of whom maintain ties with their countries of origin. Diasporas play an important role as a bridge between newer migrants and the host society. Diasporas serve not only as role models to newly arrived immigrants; they can also help youth in the host population to see wider horizons. School-based education, coupled with support networks in their local community, is vital towards fulfilling the potential of youthful diaspora members.

Japan's "Support Programme to Facilitate School Education for Foreign Children," also called the "Bridge Schools" project, provides unique experience in promoting integration through educational support for migrant and diaspora children. Bridge schools are transition schools designed to facilitate the smooth transfer of out-of-school migrant children to Japanese public schools. This project was one of the responses of the Government of Japan to the global economic crisis in 2008-2009; IOM has had the honor to implement the "Bridge

Schools" project since 2009 in partnership with the Ministry of Education, Culture, Sports and Technology, which funds it.

From 2009 until the end of 2013, some 7,300 migrant children attended bridge schools (1,445 entered public school for the compulsory education stage; 285 children entered public high school; and 1,258 children entered culturally or ethnically-specific private schools for the compulsory education stage.) Today, there are 21 implementing partners in 20 municipalities in 10 prefectures. In this final financial year of the project, I wish to thank the Government of Japan once more for giving IOM the opportunity to participate in this important endeavor, and would like to share the key lessons learned:

- Supportive host communities and local governments recognize that by helping
 migrant children to integrate educationally, the migrant communities are thereby
 empowered to contribute to the growth of the larger Japanese society and economy;
- The success of migrant or diaspora children in bridge schools depends on the support that they receive from their parents as well as their teachers (through promoting cultural diversity and mutual respect); and
- Migrant children -- like all children -- need a role model to look up to -- often someone who is like them or has had similar experiences.

3. Transnational Youth Networks can help build bridges between populations and countries

Foreign nationals residing in Japan and other host countries have enormous potential for contributing if engaged, enabled and empowered to do so. It is therefore vital to promote mutually supportive trans-national youth networks -- both to internationalize and widen the horizons of local youth, as well as to integrate migrant youth.

In response to globalization, many countries have taken increased measures to give their youth widened international exposure through study and work abroad or cultural exchange. For example, the Japan Overseas Cooperation Volunteers (JOCVs) foster cross-cultural exchange by encouraging Japanese youth to do volunteer service in developing countries. Many Japanese youth are similarly engaged as part of JICA.

I am particularly impressed by the Nikkei (Japanese Descendant) Communities Volunteer Program in Japan, including the Youth and Senior Volunteers for Nikkei Communities, who travel to collaborate in developing Nikkei communities in Latin American countries that, years ago, accepted many immigrants from Japan. On returning to Japan volunteers are able to participate in an expanding range of activities that contribute culturally and economically to both Latin America and Japan. This exchange not only increases opportunities for youth, but strengthens diplomatic and cultural ties.

Conclusion and the Way Forward

I have touched on the importance of young foreign nationals in good migration governance, and in particular education and labour mobility, integration, and how transnational youth networks help us meet the challenges and seize the opportunities of globalization. I have noted the impressive steps that the Government of Japan and local governments have taken to promote a whole-of-society approach to migrant integration, with a clear and sustained focus on youth empowerment.

With this approach, Japan is very much in the lead internationally in terms of acting on the conclusion of the UN HLD, and in terms of anticipating the much-needed integration of migration into the post-2015 UN development agenda. Meguro city, our host, has a strong engagement with migrant issues in partnerships with migrants themselves. Given the attraction to a number of migrants in cities, I would like to see more cities as engaged as

Meguro; this is one reason why IOM will hold a major global conference in 2015 on the theme of "Migrants and Cities".

I will close by repeating IOM's message on International Youth day, and I am sure that you will see that what we promote for migrant youth is very similar to the approach in Japan:

- Capacitate youth through education, skills development, vocational training, and talent mobility
- Create a platform for youth to be spokespersons for youth causes as well as mentors and role models
- Cultivate a greater sense of youths' own agency and ability to make a difference in the lives of other youths and adults.

IOM is ready to work with you in any way we can to support these efforts, in the knowledge that increased international migration is inevitable, due to demographics and other factors; necessary, if we are to maintain economic growth and development; and desirable if well governed.

WI 外国人有識者による プレゼンテーション

The integration of foreign nationals; European experiences

Presentation at the International Workshop on Acceptance of Foreign Nationals and their Integration into Japan, Tokyo, February 21, 2014.

by Professor Han Entzinger, Erasmus University Rotterdam, the Netherlands.

Immigrants in Europe

There has always been migration in Europe, within countries, but also between countries. Wars and political and religious conflicts often were at the basis of such movements, but migration was also induced by poverty and by economic opportunities. In the 19th century many migrants moved from rural areas and peripheral countries in Europe to its newly developing industrial heartland, then primarily characterised by mining and manufacturing. Many Europeans also left the continent in those days to settle in the Americas or in the European colonies. In those days there was no or very little immigration from outside Europe: Europeans went out into the wider world, but the wider world did not come to Europe yet.

During and between the two World Wars migration in Europe was less prominent, but from the 1950s onwards it took momentum again, while its pattern is characterised by several flows. First, when the colonies of several European countries became independent, mainly in the 1950s and 60s, large numbers of people moved to the former mother countries, primarily to the United Kingdom, France and the Netherlands, and later also to Portugal. A second important flow began in the late 1950s. The European labour markets – particularly those in Germany, Switzerland, Austria, the Benelux countries and France - were in need of unskilled labourers. These workers were recruited in Southern Europe and, later, also in Turkey and North Africa. The idea was that the workers would remain only temporarily. However, many stayed on, let their often rather large - families join them, and settled in Europe for good. This process was facilitated by welfare provisions in Europe that, in those days, still were much more generous than they are now. The recruitment of foreign workers came to a halt during the first oil crisis in 1973, but family migration continued for a long time thereafter. In the 1980s, immigration again began to increase when growing numbers of refugees and asylum seekers came to Europe. After the Berlin Wall had collapsed in 1989, East-West migration inside Europe also started to increase. This was partly for economic reasons – the former communist countries were a lot poorer than Western Europe – and partly also for political reasons: think of the civil war that hit former Yugoslavia in the 1990s.

Since the turn of the millennium the dominant migration pattern in Europe has changed again. The number of asylum seekers has decreased, mainly as a result of stricter legislation. There has been a considerable increase in highly skilled migration, partly intra-EU, but more and more often also from developing countries. Most European governments are explicitly encouraging this, since they are faced with ageing workforces and declining populations – phenomena that are also well known to Japan. Perhaps the most significant recent development in Europe is the large labour migration

that has occurred since 2004, when new member states in Central and South-Eastern Europe joined the European Union in several rounds. Joining the EU means that the free movement policies of the EU also applied to these so-called accession countries (in some cases after a transition period), and their proximity to the much richer Western parts of Europe led to a considerable growth in intra-EU migration.

As a consequence of all these movements, the immigrant share in the population is now between ten and fifteen per cent in most of the older member states of the European Union, the so-called EU-15. If one includes the children of these immigrants this percentage may go up to twenty or twenty-five. In most member states that have joined the Union in the past ten years, the immigrant share is still considerably lower. However, there are indications that some of these countries, for example Poland, are beginning to fill up the gaps left by those who have gone west with migrants from countries further East, such as Ukraine and other former Soviet republics, and even from China.

Not all migrants in Europe and their descendants are foreign nationals. Many who came from former colonies already possessed the citizenship of their country of settlement when they arrived. Others have become naturalised over the years, although considerable differences exist between the countries in Europe in their naturalisation policies. France, the United Kingdom and the Scandinavian countries, for example, have always been more tolerant in granting citizenship to their foreign migrants than countries such as Germany, Switzerland and Austria. Furthermore, citizens from one EU-country who settle in another member state have almost the same rights and entitlements as the citizens of that member state, so there is little need for them to become naturalised.

It shall be clear that the role of the European Union is becoming more and more important in this field. Perhaps this is also a reason why this role, as much as the EU at large, is becoming increasingly contested in quite a few member states: immigration is a sensitive issue nearly all over Europe, and in several countries anti-immigrant political parties have become influential. Interestingly, the EU's role in immigration is much more important than its role in immigrant integration. Since the late 1990s the EU has issued a number of so-called Directives regarding immigration, which are legally binding for all member states (special conditions only apply to the UK and Denmark). One reason for this common immigration policy is that it has facilitated the abolishment of internal border controls. If these border controls would still exist, they would really slow down the intense traffic between the European countries, many of which are relatively small. In their integration policies, by contrast, member states have a lot more freedom and, indeed, we do see considerable differences between them.

Three approaches in integration

In very broad terms, we may differentiate between three different approaches regarding immigrant integration. The first one stresses the temporary nature of the migrants' residence. The idea is that they will return, and therefore it is not deemed necessary for them to obtain full rights and to participate fully in the receiving society. In reality, however, migrants do not always return, even if they are expected to do so. At first, migrants postpone their return, and as time goes by they become ever more rooted in the new country. The idea of temporary residence is the traditional approach in

countries with large numbers of so-called guest workers, primarily Germany and Switzerland. Germany has changed its approach meanwhile, but Switzerland has not, as the recent referendum in that country has once more confirmed. A – small - majority of the Swiss people wishes to restrict migration, even from EU-countries, which undermines the idea of free settlement, one of the main pillars of the EU. Switzerland is not an EU- member, but it is part of the EU free movement area. The idea of temporary settlement is also rather prominent in the South European countries (Italy, Spain, Portugal and Greece). It was only in the 1990s that they began to attract larger numbers of immigrants. Many of these were in fact illegal residents, but they were tolerated because the economy needed them. Besides, South European economies have a large informal sector anyway that could accommodate these migrants rather easily. Now that Southern Europe is going through economically difficult times, many of these workers have returned home, but many others have stayed on and live in extremely harsh conditions.

The second approach is assimilation: in this approach newcomers are welcomed, but on the condition that they adapt as much as possible to the culture of their new country. Immigrants are expected to learn the local language as soon as they can, and to identify with the core values of their new country. France is the classical example of this assimilative approach, which we also know from the United States. Many other European countries, above all the Netherlands, Denmark and Austria are increasingly moving in this direction. The problem here is that not all migrants are able or willing to assimilate. A limited degree of assimilation will always take place, but it often takes time, sometimes even generations, before this happens. Lower-skilled migrants in particular face difficulties here. Their level of education is low and they have difficulty in familiarising themselves with the complex European societies and their languages. Besides, they are often concentrated in the least attractive jobs and the least attractive neighbourhoods, their entitlements to social provisions may be limited and they may experience discrimination. Consequently, striving for assimilation in practice often leads to marginalisation, socially and also geographically. This is clearly visible, for example, in the outskirts of Paris, the so-called *banlieue*, the stage of serious rioting several years ago now.

The third approach is usually referred to as multiculturalism. It sees the migrants' presence as permanent, but it is respectful towards immigrant communities and it facilitates their cultures. The classical example here is the United Kingdom, although Swedish and Dutch policies also had multiculturalist traits, certainly in the past. Outside Europe, Canada is an often-cited example of multiculturalism. Multiculturalism accepts migrants as permanent residents, but, unlike what happens in the assimilationist approach, it does not force newcomers to become like the mainstream population. Special facilities may be developed for them in areas such as mother tongue teaching. supporting immigrant associations, facilitating religious pluriformity, accepting food habits, dress codes etcetera. Consequently, migrants are enabled – at times even encouraged - to develop what is sometimes referred to as their own 'parallel societies'. However, creating separate facilities for migrants often makes it more difficult for the established institutions, such as schools or health care facilities, to open up for the newcomers. It may also foster segregation and the development of special neighbourhoods with large migrant communities. Even when such segregation is based on free choice, one may wonder if in the long run the stronger forms of multiculturalism

can be matched with a minimum degree of social cohesion that every society needs. Just like we have seen for assimilation, policies of multiculturalism may equally entail a risk of keeping migrants in the margins of a society.

Of course, the three approaches I have just described – temporariness, assimilation and multiculturalism – all are ideal types. When we look at today's reality in Europe we do see certain differences between countries and also over time, but we also see elements of all three approaches existing alongside one another, often as a result of political compromise. Actually, irrespective of the approach chosen, we do see certain problems emerge all over Europe, particularly among the children of migrants, the so-called second generation. Many of them experience problems at school, they find it difficult to find a job, they encounter discrimination and the community to which they belong is not always able to give them the support they need. Their parents, in particular, have grown up in a completely different culture, many of them have only low skills and they often do not speak the local language so well. Yet, it should also be stressed that many youngsters of migrant origin have become quite successful in spite of these difficulties, and are able to bridge cultural differences. This, however, presupposes a certain degree of acceptance at the side of the host population, and that is sometimes lacking, particularly in times of economic crisis.

Elements of a successful integration policy

Because of the time constraints it is impossible for me to sketch fully what I think an effective integration policy should look like, given our European experiences of the past fifty years, the positive as well as the negative ones. I will therefore briefly highlight six areas where I am convinced that public authorities and others may contribute to a fuller participation of migrants, particularly those of the second generation. In my view – and based on European experiences - the following elements are essential in a successful integration policy:

- 1. A sound legal status, security of residence, equal access to social provisions and to citizenship. If migrants run the risk of being sent home any moment, they are not able to work on their integration. Of course, no one will expect that a migrant freshly arriving in a country has exactly the same rights as long-standing citizens of that country, but they do need a perspective. A perspective that guarantees that if the migrant is to stay on, he or she will gradually obtain more rights, for example the right to family migration, entitlements to social security, full access to the labour market, to education, housing and health care, and also full political rights. After a certain number of years, migrants must also be allowed to become full citizens of their new country. This is the best way to guarantee equality. In Europe, the formal waiting period for naturalisation varies between three and twelve years, depending on the country and on the migrants' original nationality. Children of migrants automatically obtain the new country's citizenship in some countries, but not in others. The possession of dual citizenship is a contested issue in some countries, but, again, not in others.
- 2. Facilities for learning the language of the host country, if necessary even on a mandatory basis. A country that welcomes migrants and gives them rights and entitlements may also ask something in return. More than in the past, we see that

European countries require from their migrants that they learn the local language and that they familiarise themselves with the country's cultural heritage and social habits. Most West European countries now provide so-called integration courses and require migrants to pass an integration test. In some cases, particularly for family migrants, initial tests are even taken in a country's embassy before the migrant leaves. In several European countries attending integration courses and passing the test are mandatory. If migrants do not pass, their social entitlements may be restricted, their length of stay may be limited or in some cases they may even be extradited. Knowing the local language is a crucial condition for a fuller participation in a society, and it is the task of the government of that society to make sure that the necessary facilities are available.

- 3. Access to education and employment on the same conditions as the local population. In nearly all countries of the world migrants are overrepresented in low-skilled jobs, poorly paid and with little perspective. They are more likely to lose their jobs in times of crisis. This situation is often passed on to their children. Even those who are born and raised in the country to which their parents had once moved, tend to do less well at school and in the labour market than their peers who are part of the native population. It is the task of government to make sure that there are no differences in opportunities between the local population and persons of migrant origin. They should all have equal access to education and to work. Wherever systematic differences in opportunities appear, special measures should be taken to redress these. This, of course, is not only the task of public authorities: private companies and educational institutions should also make efforts to reach out to migrant populations. Don't forget that, particularly in countries with declining populations, all talents should be mobilised!
- 4. Facilitate good relationships between the immigrant communities, the host community and the countries of origin, while also leaving enough space for individual integration. All immigrant countries, also in Europe, face tensions between newcomers and the established population. Such tensions may be rooted in prejudice, in fear of difference, or in anxiety about being overwhelmed by others. Whatever the reasons are, and no matter how realistic such fears are, they should always be taken seriously. At the same time it should be made clear to suspicious native populations that migration also has enormous benefits. It facilitates economic growth, and it leads to a culturally more diverse society that can open up more easily to other countries. A way to achieve this is to promote good relationships between the immigrant communities and the host community, which will lead to a better mutual understanding. It should be kept in mind here that integration is a two-way process. If the receiving society is unable or unwilling to open up to newcomers, their integration will be a most painful process.
- 5. Combat racism and discrimination, and present role models for successful integration. European countries differ considerably in the degree to which their governments actively promote immigrant integration. Some have much more elaborate and detailed policies than others. This becomes immediately visible when one compares, say, Sweden and Italy. What all countries have in common, however, is a legal framework to combat racism and discrimination. In the United Kingdom this has long been the cornerstone of integration policy, as has been the case in the USA.

Racism is the belief that certain races or ethnic groups are superior to others, and discrimination is unequal treatment on grounds such as race or ethnicity, that are not relevant in the given situation. Racism and discrimination are not always easy to identify, but this cannot be a reason for not making it an offence and for not actively prosecuting any perpetrator. It is also important to be active in taking away prejudice against minority communities. Highlighting role models of successful immigrants has proved to be a useful method here, since it shows to the native population that migrants can also attain successes, while it encourages migrants to emulate the model.

6. Remember that integration is a local process in the first place. Immigration is primarily the responsibility of the national state, and in Europe also of the EU. Integration, however, takes place at the local level, rather than anywhere else. In most countries of the world, and certainly in Europe, migrants tend to be overrepresented in cities. In my own city, Rotterdam, exactly half of the population either has been born abroad or has at least one parent born abroad. Recent immigration has drastically changed the outlook of many European cities, and has made their populations much more diverse. Meanwhile many cities have built up a lot of experience in dealing with diversity. The big issue is to what extent all citizens should be treated the same, or whether special facilities and special policies should be developed for the different migrant communities. There is no easy answer to this dilemma. Certain targeted measures for immigrants will always remain necessary, but the overall trend in Europe is now that there should be no group-specific policies and that major institutions should be open to everyone. This, however, requires a change in current practices so as to better accommodate the needs of immigrants.

In today's Europe, immigrants have become an integral part of the population, particularly in cities, and they should be treated accordingly by the native population and by the authorities. This certainly remains a challenge and there is still a long way to go, also in Europe. I can only hope that through exchanges like today's workshop some of our knowledge and experience can be transmitted to you.



The Integration of Foreign Nationals; European Experiences

Prof.Dr. Han Entzinger

Erasmus University Rotterdam Department of Sociology

February 21, 2014





Migration in Europe (1)

19th century:

- Rural-urban migration (Industrial Revolution)
- Migration to colonies and to Americas

1st half 20th century:

- Relatively little migration





Migration in Europe (2)

2nd half of 20th century:

- Post-colonial migration (1950s, 1960s)
- 'Guest worker' migration from S. Europe, Turkey and N. Africa (1950s 1970s)
- Family migration (1970s 1990s)
- Asylum seekers and refugees (1980s, 1990s)
- East-West migration (since 1990s)







Migration in Europe (3)

Since 2000:

- Highly skilled migration from EU and developing countries
- Intra-EU labour migration from new to old member states
- Growing opposition to immigration





Migrants in Europe

Western Europe:

- 10-15 per cent of population are foreign-born
- 20-25 per cent, including second generation

Southern Europe:

- 10-15 per cent foreign-born,
- Few second generation yet

Eastern Europe:

- Only recently emerging as an immigration area





Foreign-born and foreign citizens in selected countries (in % of total population, 2011)

	f.born	f.cit.		f.born	f.cit
Luxembourg	32.5	43.1	Netherla	nds 11.2	4.0
Switzerland	24.7	22.4	Greece	11.1	8.5
Austria	15.5	10.8	Belgium	10.6	9.7
Sweden	14.7	6.6	EU-27	9.7	6.6
USA	14.3	6.6	Italy	8.8	7.5
Spain	14.2	12.3	Japan	1.9	2.0
Ireland	12.4	8.1	Poland	1.4	0.1
Germany	12.0	8.8			
UK	11.6	7.2			
France	11.2	5.9		1	2 4 CONTROL OF THE PROPERTY OF





Migration and the EU

- Major role for EU in immigration policy
- Limited role for EU in integration policy.
- Immigrant integration is a responsibility of the member states and, increasingly, of local authorities.





Approaches in integration

- 1. Temporary residence
- 2. Assimilation
- 3. Multiculturalism







Problems of migrants

- School achievements
- Access to jobs
- Discrimination
- Lack of support by parents and community
- Language problems

Do not forget that many migrants are quite successful!





1. A sound legal status, security of residence, equal access to protection and to citizenship







2. Facilities for learning the language of the host country, if necessary even on a mandatory basis.







3. Access to education and employment on the same conditions as the local population.







4. Facilitate good relationships between the immigrant communities, the host community and the countries of origin, while also leaving enough space for individual integration.







5. Combat racism and discrimination, and present role models for successful integration.





5. Combat racism and discrimination









6. Remember that integration is a local process in the first place.







Major dilemma in integration policy:

Should all citizens be treated the same or should special facilities and special policies be developed for migrants?





Thank you for your attention!

Arigato!



Ⅲ 若手外国人による体験談

皆さんこんにちは。私は福田愛と申します。

でもそれは実は通称で、私はキムキョンヤン、韓国生まれ韓国育ちのいわゆるニューカマーの在日韓国人です。

12 年前、中学 2 年生の夏休みのときに、私、弟、母の 3 人で日本にいる親戚の家に遊び行きました。夏休みが終わろうとしているのに、母が家に帰ろうとしないので、その理由を私は母に聞きました。母は当たり前のように、ここで住むからと答えました。あまりにも突然で何も言い返せませんでした。

そして、今日からこの人がお父さんだと、何度かあったことがあるおじさんを改めて紹介されました。要するに母は日本人と再婚し、日本に移住すると決めたのです。移住と再婚について、私と弟に一言も相談してくれなかった母を私は憎みました。

こうして私の日本での生活は始まりました。新しいお父さんは、私と弟の二人にとっても優しく接してくれました。しかし、お父さんにも前妻と子どもが3人いて、養育費や生活費のことで母と喧嘩することが多かったのです。毎日のような夫婦喧嘩が嫌で家にいたくないとどんどん思うようになっていきました。しかし、このような生活に慣れようと、必死にがんばっている弟の姿をみて、弱音なんて吐いていられない、憎しみをバネにして前に突き進みたいと決心しました。

夏休みが終わり、日本の学校に通い始めました。まずは、いじめに遭わないように、お父さんが日本語の名前をつけてくれました。歴史的背景から学んだ日本があまり好きでなかった私には、日本人の名前は嬉しいものではありませんでした。日本語が分からないので学校の授業の内容も理解できず、毎日嫌なことばかりで、どうしたらいいかわからない状況でした。しかし、幸いなことに私が通っていた中学校は帰国子女が多く、周りの友達が私に優しく積極的に話しかけてくれて、無事に大学に進むための勉強を始めることができました。そして私が通っていた中学校の中野区教育センターから先生が来て授業をしてくれることもありました。その先生から、中野区の国際交流協会というボランティアの先生たちが日本語を教えてくれている日本語クラスのことも教えてもらいました。このようなことがすべて私の不安の軽減と自信につながりました。

高校受験当時,最も壁となったのは学力です。私は経済的な理由もあり,都立を志望していましたが,結局,当時の学力では選択肢がかなり狭まるため,私立に入学することにしました。私立に入学し,バイトを掛け持ちして頑張っていても,授業料が払えず停学になったこともあります。そんなときに助けてくれたのは、中野区国際交流協会で出会った恩師でした。何十万にもなる授業料を払ってくださったのです。

お世話になった方々へ恩返ししたいという一心で、勉強も頑張り始め、子どものとき

からの夢であった医療関係の仕事に就くため、看護学科を志望し、大学に無事受かりました。そんなときに母が倒れて入院したり、弟が高校に入学したり、家の家賃が払えず家を追い出されたりと、また経済的に厳しい状況に陥りましたが、そのときは、日本人の友達が助けてくれました。少しずつではありますが、私の中で、日本人の見方が変わり始めました。

こうして大学も卒業、晴れて看護師になって5年、今の私があります。私は幸いなことに、すばらしい人たちと環境に恵まれ、日本で社会人になることができましたが、中には困難や障害を乗り越えられない外国人もたくさんいます。そんな外国人のためにできることは数え切れないほどあると思いますが、まずは情報の提示が大事だと私は考えています。日本語教育や健康、進学、就職、金銭的なことなど、そのほかの窓口などで、困難や障害を乗り越えるための情報を提供してもらえることが、外国人にとっては大きな力につながるのではないかと、私は考えています。外国人が目にしやすい場所に、外国語又はわかりやすい日本語で情報を提供するのです。在住する地域や団体などのコミュニティを知ってもらい、問題を解決するための機会をつくることが大切です。そして、その情報を共有し、各地域やコミュニティが連携していくことで、より質の良い幅広い広域な情報網ができあがると思います。

第二は、在住する外国人全てに必要な学習への支援です。中でも日本語教育です。日本語が話せなければ何も始まりません。社会進出に必要な日本語力を身につけ、そして自立する力を身につけることが、日本の将来にも大きなプラスに影響していくと考えられます。また、学齢期の子どもたちに対しては、日本語だけではなく、強化学習、進学支援、自立支援も必要です。どんなに日本語が話せていても、学力がなければ進学や就職口の選択肢が狭まります。できるだけ選択肢を広げることで、より幅広い分野で外国人が活躍できる土壌ができるのではないかと考えています。

第三は、私が日本語以外で最もつらかった経済的な問題です。日本語ができて学力があっても、経済的な理由で、進学や夢を諦めなければならないケースもたくさんあります。特に高校生までは、奨学金なども外国人は対象外であったり、選考基準が厳しいものがたくさんありました。外国人の経済的負担を軽減できるシステムがあればなと思ったことは何度もあります。

第四は、バイトや就職での日本企業の協力です。ここ数年、日本人でも就職難や派遣切りが騒がれている中で、外国人が日本人と競争し、日本の企業に採用してもらえるということは簡単なことではありません。私も実際学生時代に、外国人であるということを理由に、バイトの面接すらしてもらえなかったこともありました。そして、看護師の

職を選んだのも、日本の国家資格さえあれば採用してもらえる、というのが大きな理由の一つでした。国籍ではなく一人の人間として、その人の能力と良さを個々に見て評価して、外国人が日本の社会に貢献できる機会を作って頂くためにも、日本の企業の理解と協力が必要なのです。是非お願いいたします。

第五は人間関係です。学校の友達、教職員、家族、そして周りの知人など、自分をとりまく周りの人間関係が環境に大きな変化をもたらすと考えています。物質的、精神的サポートになり、そして信頼できるという人が誰か1人だけでもいるということが、外国人にとっては大きな力につながると思います。相手の国の文化や習慣、そして考え方をわかり合うためにも、異文化交流ができる場を積極的に設けていく必要があります。そのために様々な活動をしているNPO、NGOの団体が、連携をとりあって総合的な支援ネットワークを作り上げることができればいくつもの複合的に問題を抱えている人たちを救え、それらの活動を通して、日本と外国双方がお互いの考え方を認識し、理解し、そして、共通の基盤が持てるのではないかと考えています。

第六は、母語保持とアイデンティティ確立です。私が来日していたとき、私は既に 13歳で、ある程度母語が保持されていましたが、もっと幼い時期に日本に来る子ども たちには、母語としての言語はもちろん、文化、思想、自分の考え方を表現する力すら 身についておらず、一見、バイリンガルのようでありながらも実は母語も日本語も生活 言語止まりであるというダブルリミテッドである場合が多いのです。少なくても一つ、できれば二つの母語レベルの言語を持たなければ、日本社会で自立した存在にはなれません。

これらのことを可能にするために、少しでも多くの外国人の意見を取り入れ、色んな活動をしていけるチャンスを与えていただきたいのです。具体的には、外国人相談窓口での通訳だったり、情報の提供とともに、その在住する地域やコミュニティとの連携し主体的にコミュニティの一員として働きたいと思っている外国人材が日本と外国、双方二つの社会の架け橋となれるようなシステム作りが、必要になると私は考えています。来日してから今日まで支えてくださった皆さん、皆さんのおかげで、私はここまでくることができました。みんな私が日本人でないからこそ会えた人であるのではないかと私は考えています。

そこで、私が外国人であるからこそできることを考えてみました。まずは政府や行政、色んなコミュニティや団体に、こうして欲しいと訴えるだけではなく、私たち在住外国人にもできることはたくさんあるので、できることからやっていきましょう。私は今後機会をつくり、母語を活かして同じ立場にいる外国の人たちの相談に乗ったり、ネットワークを確立していきたいなと思っております。思ったり考えたりすることは誰にでも

できますが、それをどのように生かして有効なものに仕上げるかは、その人次第です。 だから私は次世代の若手外国人に伝えたいです。外国人が受け入れられる社会を作るために、私たち外国人にできることがたくさんあります。そして、私たちの積極的な行動力が、より外国人が住みやすい世界を作っていくということを知っていただきたいです。

今回は、私の思いを伝えることができる、このようなすばらしい機会をいただき、大変嬉しく思っております。実は来日してから今日までのことを振り返ってみて、私の中で正確に答えを出せなかった大きな疑問が一つありました。来日して 12 年、母国に帰国する予定もなく、日本に来て 12 年、私の人生のちょうど半分を迎えようしていますが、帰化もせず日本で外国人として生きている理由です。今、その答えがやっと見いだせたような気がします。それは私が外国人であることに誇りを持ち、自分の経験を活かし、これからも続くであろう日本の在住外国人のために力になりたいという思いです。私は少しでもこれからの次世代の若手外国人の力になりたいと思い、その第一歩として、「多文化子ども自立支援センター」というNPO団体のスタッフになりました。まだ駆け出しの私ですが、私の思いを夢で終わらせるのではなく、少しでも現実に近づけてみせます。そして、次に皆さんにお会いしたときには、私の努力が多少なりともご報告できるよう頑張っていきます。

本日はつたない私の話をお聞きくださいまして、ありがとうございました。

みなさん, こんにちは。

私は伊木ロドリゴといいます。愛知県豊田市立保見中学校で英語の先生をしております。こんなにもすばらしい舞台で話す機会を与えられてとても嬉しく思います。実は4年前学生だったときも、ここで話をさせてもらいました。怖いもの知らずであったこともあり、今ほど緊張していなかったように思います。大人になるとビビリになってしまうものですね。でも、とても楽しみにしていました。貴重なチャンスに感謝しています。

本日は自分の経験から3つの話をさせてもらいます。

一つ目の話は言葉です。日本語能力ゼロで来日しました。1996年のことです。完全に怖いもの知らずの度を超えています。小さな小学校の4年生と言うと、既に人間関係ができており、転校生は部外者、毎日訪問客の感覚でした。

2020 年ここでオリンピックが開催されます。旅行者に対して、「おもてなし」がうたわれています。

残念ながらあの頃、私はあまり優しくしてもらえませんでした。初めは人気がありましたが、何も返答ができず、知らないがためにルールを破り続け、勉強が全くできない、私は徐々に嫌われ、仲間外れにされ、いじめられました。まさに外の人、外人でした。 友達は写真に写っている弟のアンドレだけでした。

日本語を覚えるのはとても大変です。なんで文字が3種類もあるんだ、なんで話す相手によって話し方が変わるんだ、なんで話す言葉と授業で使われている言葉が違うんだ。なんで右から左へ読んで行くんだ。もう日本語は難しすぎます。赤ちゃんが日本語を覚えられるのが不思議で仕方がありません。私は相当苦労しました。2年すると、私は日常会話の日本語が話せるようになりました。すると、それまで暗黙の了解で、勉強できなくて当たり前だよなというような雰囲気がなくなっていきました。テストで悪い点をとると、「バカじゃん」、「こんなものもできないのか」といったことを言われるようになりました。「ペラペラなのにテストができないのは勉強をさぼっているからだろう。」確かに必死にやっていたとは言い切れませんが、さぼってはいなかったと思います。話せるのに授業がさっぱり分からない、なんでみんなが当たり前のように分かっていることが僕には分からないんだ。私は5年近く違和感を感じながら過ごしました。

数年後自分なりの答えを見つけ出しました。私は家に帰ると、父親はポルトガル語の新聞や雑誌を読んでおり、母親はブラジルのドラマを見ています。二人の会話はポルトガル語で、話す内容は工場での出来事や週末の買い物のことです。一方で、日本の子どもたちは家に帰れば本棚に本が並べられており、新聞が置いてあります。親は日本語の新聞を読み、政治・経済、最近のすさまじいニュース、高校の話をします。宿題に困れば、親が手伝うことも可能です。家の中でも、子どもの能力が上がっていくことが期待

できます。親の会話自体が現代社会の授業です。

外国人の子どもの家庭に戻りますと、その親は日本の社会のこと、政治経済にはもちろん精通していません。宿題を手伝える親は滅多にいません。精神的なサポートができても、学習面、高校や進学についての情報など親の助けが期待できないため、外国人の子どもはひとりぼっちです。言葉を覚える大変さはここからも生まれてくるような気がします。学校には情報源としての大事な役割がゆだねられていると思います。

私は中学校で毎週漢字のテストをする前田先生に出会いました。そのテストで満点をとると黒板の端に名前を書いてもらえました。こんなにも小さなシンプルなことがきっかけで、私は漢字学習に力を入れることができました。名前を書いてもらったら先生に褒めて貰える、そして、仲間たちからも「ロド君すごい!」と認めてもらえ、外人の私が仲間に入れる許可を与えられると思いました。そうすれば、外人ではなく一人の人間としてのロドリゴを見て貰えると信じていました。あのときに漢字をきちんと学んでいなければ、私は高校進学も大学進学もできなかったと思います。

前田先生はこんなことも言ってくださいました。「日本でやっていく可能性があるなら、漢字ができなきゃ今後ずっと勉強についていけない。ロドの未来はなくなる。別にロドがブラジル人であることは何もマイナスな要素ではない。」私は日本語を覚え、ブラジル人としてこの国で頑張りたいと思えた瞬間でした。

物事をはっきり言わない日本文化であるからこそ、きちんと話せなければ、勘違いされ、受け入れられるどころか、拒否されてしまいかねません。中途半端にしか話せないと、結局のところ、いつまでも「外国人」という目でしか見られなかったと思います。言葉の大切さを教え、ブラジル人の私でも日本で成功できることを教えてくれた、前田先生に心から感謝しています。日本語を覚え、日本人に認めてもらえれば、外人が仲間に入る許可を与えられると思っていた、あの頃の気持ちは今も生き続けています。一人の人間としてロドリゴを見てもらえるようになった今だからこそ、より言葉の力を強く感じます。英語の先生、言葉の先生になりたいと思ったのは、ここに原点があるのかもしれません。はっきり物を言ってくれいない文化、暗黙の了解だとか、建前だとか、分かりにくい文化を持つこの国、こういってしまうと日本嫌い人間に聞こえてしまいそうですが、私はここが好きです。好きだからこそ、変えたいところがたくさんありますし、変えたいからこそ先生になりました。

次の話は人についてです。人は出会いや経験でできていると思います。私は貧しい生活を長年強いられました。そのため日本に来ることになりました。写真はブラジルのパラナ州という田舎に住んでいたときのものです。ですから、何となくレベルは違いますが、アフリカの人たちの気持ちが想像できると思います。

私と弟を健康に育てて、大学へ行かせるための親の工場での苦労とお金をなんとかするための戦いをみてきました。だから私は、ブランド品や贅沢には全く興味がありませ

ん。それが私の経験してきた全てのことの結果だと思います。逆にブランド品や贅沢に目がない方がいてもそれもいいと思います。それが、その人の持っている経験の結果ですから。親の育て方、育った環境、出会った人、これまでに読んだ本、見てきた映画、私たちは多くのことを自分の経験として持っています。片親しかいないとか、親が相手してくれず寂しい思いをしてきたとか、兄弟が多く引っ越しが多かったがために親友と呼べる人と出会えなかったとか、全ての経験がその人を形成します。自分ならこのようなことはしないけどなということはあると思います。それでも、今までの経験によってその人の行動が決まってきます。見下すのではなく、侮辱するのでもなく、決していじめるのでもなく、この人はなんでこんなことをするんだろうとちょっと立ち止まってみると、色々なことが見えてきます。

自分の力だけではどうにもできなかったこともあると思います。これからやってくる 外国の方をただの労働力として見てしまうと間違いなく不満が生まれます。トラブルが 起きます。そして、双方から愚痴が出てしまいます。それらを避けるためには、人の行 動の裏にある背景を想像し、チャンスを与え認めてやる。先ほどの話にもありましたが、 国籍には関係なく、大人もチャンスが欲しいし、夢を持って頑張ろうとしている一人の 人間として、頑張りを見てもらいたいというのは、大人も同じだなと、ちょっと大人に なった今なら分かります。

三つ目の話は、夢と目標についてです。高校1年生のとき病に襲われました。生存率50%と言われながら、白血病で入院しました。入院が1日でも遅れていたら間に合わなかっただろうと医者は言っていました。病院に行きたがらない私を父親が無理矢理連れて行かなければどうなっていたのか分かりません。抗がん剤治療を繰り返し、毎日、嘔吐に襲われ、髪の毛は抜け落ちました。自分なら大丈夫と信じつつ、正直不安な気持ちが大きかったです。なんとか耐えきって、7ヵ月間の入院を経た後、家族の元へ帰ることができました。

私は今、病気に感謝しています。病気は私の人生を変えてくれました。入院したことによって私は留年しました。初めは留年をひどく嫌がりましたが、留年こそ運命を変えてくれました。私は愛知県立大学の英米学科の卒業生です。私が大学受験をした年は、この愛知県立大学の英米学科の推薦入試が始まった年とぴったり重なりました。これだけでも運命を感じましたが、実は愛知県の教員採用の国籍条項がなくなり、ブラジル人の私でも教師になれることになったのも、ちょうど私が採用試験を受けた年です。採用試験のために、長いことこの生活を続けたら必ず死ぬぞ!という程勉強しました。なんだかバチが当たりそうなほど物事がうまく転がり、現役で合格することができました。私は元々できる人間ではありません。やりたいことがあり、そのために戦った結果が、合格というトロフィーの結果につながったと思います。

入院中は死についてではなく、退院後の自分を待っている人生についてたくさん考え

ることができました。先生になるという目標もこの時期に生まれました。まさか、いつか自分が先生になれるとは来日当初は想像もしていませんでした。まわりの人たちも先生たちも、両親も、誰も想像できなかったと思います。死と直面した、あの入院がそのきっかけになるなんて、皮肉にも聞こえそうですが、事実です。

振り返ってみると、全ての出会いと経験が今につながっています。マイナスな経験は 人の目を覚まし、今の幸せや課題に気付くきっかけとなります。試合に勝ち続けるチームは、今の課題に気付けなかったりするが、負けたチームは反省し、悔しがり成長していきます。マイナスな経験は決して悪い経験ではないかもしれません。特に一生懸命生きている中での経験ならなおさらです。目標があればそれを達成する原動力にしかなりません。私にとって、教師になるという目標が原動力でした。今の自分に満足していないのであれば、今の生き方に違和感を感じるのであれば、そこで立ち止まるのではなく、目標、夢、好きな生き方を追い続けるべきだと、自分に言い聞かせています。

入院した日に父親から忘れられない言葉を言われました。その言葉を残して話しをしめたいと思います。

「私たちは耐えられる試練しか与えられない。」

私はこの言葉を忘れたことはありません。人はいざとなったら、すごい力を発揮できるために、小さな壁をたくさん、たくさん経験しているのだと思います。

私もそうでした。大きな壁が立ちはだかったときのために、それまで言葉の壁にぶつかり、漢字に苦しみ、いじめにあったんだなと今ならはっきり分かります。これからも、 自分を勇気づける言葉として、今後も伝えていくメッセージとして大事にしていきます。 私たちは耐えられる試練しか与えられません。

ご静聴ありがとうございました。

™ パネル・ディスカッション

1. 外国人児童との出会いからの決心

20年前、公立小学校で勤めた時に外国人児童と出会いました。初めて外国人児童が置かれている状況を知り、彼(女)らが暮らしやすい社会にしたい、その時私は強く決意しました。そして、いつか彼(女)らに胸張って会いたい、その願いだけで今まで取り組んできました。

 \downarrow

- ・阪神淡路大震災後の外国人支援ボランティアやコミュニティビジネス参画等を通じて、国内に暮らす 外国人住民と多くの対話をしました。そして、子どもが置かれている実態と社会の問題を知りました。
- ・再度の大学進学から大学院進学して国際協力を専攻し、世界の「常識」を学びました。また、JICAインターンシップ(ボリビア)参加等を通じて、日本の援助の実態も学びました。

i

・1990年の「万人のための教育(Education for AII)世界会議」以降、途上国における教育政策をはじめ、先進国・国際機関の国際協力政策等における意思決定は、万人のための教育の達成が国際社会の一致した目標です。そして、2000年9月の国連ミレニアム・サミットでは、開発分野における国際社会共通の目標が掲げられました。その1つに、「2015年までに、すべての子どもが男女の区別なく初等教育の全課程を修了できるようにする」とあります。

ī

- ・私が 2003 年 4 月~2005 年 3 月までに行った調査(岐阜県可児市)では、不就学者が実在すること、それは日本語の理解度や出生地などは関係ないこと、日本の公立中学校からの中退者が多いことなど、不就学に陥る要因やその背景がわかりました。一方で、外国人コミュニティにとって、外国人学校は大切な学び舎であることもわかりました。
- ・残念ながら、外国人の子どもに対して日本政府は、「世界の約束事」を守るための体制を未だ構築していません。

2. 自治体の工夫により改善できることとできないこと

- ・私が行った調査以降の2005年頃から不就学についての関心は高まり、各地で不就学者減少にかかわる取り組みが開始しました。これらの実践から、自治体の地域事情に即した工夫や実践次第で、外国人の不就学問題の改善方法があることが明らかになってきました。
- ・しかしながら、「年齢を軸にした就学扱い」のため、学齢期に不就学で過ごしてしまった若者が再チャレンジしようとしても、その方法はとても困難を伴うものが多いのが実情です。加えて、身近な大人で活躍する人が少ないために具体的な目標が持てないこと、外国人学校の扱いから生まれる諸問題のことから、地域レベルの実践での限界もわかってきました。

3. 外国人の若者の育成から日本社会が抱える社会問題を解決する糸口へ

- ・メーンストリームの進路に進むことができた外国人の若者は、個々の自助努力によるものが多いです。 特に、メーンストリームの進路に進むためには、「日本人と同じであること」が条件です。
- ・「日本人と同じ」「日本の公立校と同じ」が求められることより、母語が母文化は尊重されません。そのために、アイデンティティに悩む若者、自己に自信を持てない若者も実在します。
- ・メーンストリームの進路に進むことができずに苦しむ外国人の若者の育成の在り方を考えていくことは、社会問題の一つである「ニート・引きこもりの日本人若者の育成の在り方」の解決にヒントを与えるのではないでしょうか。つまり、「メーンストリーム」以外の、多くの道の在り方や社会の在り方を 創造することが重要であると、私は考えます。

<最近取り組んだ活動からの学び>

- ・高校(全1年生対象)でのキャリア教育の実践から 別添資料/朝日新聞 2013年 12月 14日岐阜県版
- ・中学校でのキャリア教育の実践から 別添資料/中日新聞 2013 年 12 月 10 日松阪・紀勢版
- 渡辺 マルセロ「2-2 外国にルーツを持つ若者たちが希望を持てる社会づくり」自治体国際化協会発行自治体国際化フォーラムー(特集外国人住民と共に活性化する地域) 2014年3月号 pp.8-9(予定)

〈発言の主旨〉

平成22年3月までの24年間、公立中学校教員として学校現場で働き、後半の12年間は「外国人生徒担当教員」という立場で「少数派」を支援する職務に就いた。大学に身を移してからは、「教員全体の意識改革が急務」という信念のもと、教員向け手引き書の執筆や教員研修事業を中心に従事している。日本に暮らす外国人の子どもや大人達の様々な状況に接し、受け入れる側の日本人に伝えたいことは多い。今回はワークショップ課題として与えられた「日本語習得」「コミュニティの役割」「日本社会側の問題」に的を絞り、実際の経験や著書からの事例を述べようと思う。

【日本語習得】

文部科学省が 26 年度から実施する「特別の教育課程」による日本語指導の正規授業化は、法的な裏付けがなかった「学校における外国人等への日本語指導」を、「文科省の示す要件に沿って実施する」事を定めたもので、現場の混乱を招くとも言われるが、私はこれを「歓迎すべき大混乱」と捉えており、次年度からの動きが楽しみでならない。

これまで集住地域などで外国人支援に関わった教員は、試行錯誤の自努力により日本語指導を始めとするスキルを身につけた。私もその一人だが、本来教員になるための要件に「外国人支援」は入っていないため、「専門外」のスキルを身につけるには大変な苦労が伴う。しかし、成長期の子どもへの日本語指導は「教員ならその気になれば誰でもできるもの」という結論が、支援経験者に共通する本音だろう。日本語指導の苦労より、他の教員から、「日本語教室って特別な事をやっている」と思われ、理解されない心労の方が大きかったと思う。「特別の教育課程」の実施により、日本語指導は「特別な事」ではなく「教員誰もが関わらねばならない活動」に昇格するわけだ。

現場での課題は「いったい誰がどうやって指導すればいいのか」という点に話題が集中しているようだが、本当は もっと大切なことがある。それは、教員全体が外国人や日本語の問題を考える事が、<u>外国人児童生徒だけでなく、か</u>れらと成長を共にする「日本人児童生徒に対して大きな教育効果をもたらす」という事実である。

中学校時代、一般の教員から「自分の授業を外国人生徒が理解してくれない」と相談を受けることがあった。教員の授業を見学していつも感じたことが、「教員自身がわかりやすい日本語を話していない」という現実だった。近年は、外国人児童生徒の母語の多言語化が進み、学校内の外国人の子ども全てに「母語によるサポート」をすることが難しい状況となった。そこで注目されているのが、「やさしい日本語」によるコミュニケーションである。前述の「特別の教育課程」の中にも、「日本語による通常授業に適応できるための日本語指導を目標とする」と明記されており、「基礎的な日本語習得を習得した後は、基本的に日本語を使って支援する」という考えに私も賛成である。そこで必要となるのが、教員が「やさしい日本語」を的確に使う能力である。授業が理解できずにいるのは、実は外国人児童生徒だけではない。定期試験の結果を見ても、最下位は外国人生徒ではなく日本人という場合も多い。全ての教員が授業において「やさしい日本語」を使おうとする取り組みは、一部の日本人児童生徒の直接支援にもつながり、教育活動全般の大幅な向上につながるはずである。

【コミュニティの役割】

現在、栃木県内全ての小中学校を対象に、「学校における国際理解教育」の実態に関するアンケート調査をおこなっている。アンケートに、「貴校は特色ある国際理解教育を実施しているか」という質問を設けたところ、大変興味深い回答がいくつも寄せられた。その要旨は「本校は多くの外国人児童が在籍しているため、日常の教育活動そのものが国際理解教育となり得ている」というものだ。具体的には「児童は外国人との日常生活や学習活動を通し、少数派や異なるものと理解し合うことの大切さを学んでいる」という回答内容である。

学校は子どもにとって「自分と異なる他者と"何とかして"共生しなければならない」場所であり、特に外国人が在籍する学校には、「お互いの異なる文化も理解し合わなければならない」という小社会が形成されている。上に挙げた「本校は日常の教育活動そのものが国際理解教育である」と回答した学校も、一朝一夕に今の成果が得られたわけではないのは当然である。そこには長い期間の子どもたちの葛藤や教師の努力が礎にあり、日本人保護者を含む地域コミュニティとの相互連携が存在することを想像するのは容易い。

一方、地域社会を見ると、「自分と異なる他者と"何とかして"共生しなければならない」という意識は学校と比較して希薄だと感じるが、それを「必要性がないから」と片付けてしまうのは短絡的である。中学校勤務時に、周囲になかなか馴染めず学校を休みがちだった、南米系女子生徒の家庭を訪問した時の父親の言葉が印象的であった。「オレ達は覚悟を決めて家族一緒に日本に渡って来た。だから大抵のことは我慢して乗り越えたいと思っている。でも先生、日本人は外国からやってくる人間を受け入れる覚悟をしていないよ。だからわかり合えないんだ。」

社会全体が異文化との共生を試みる時に、私は小中学校における実践を生かすことはできないだろうかと考える。 少々乱暴ではあるが、地域社会を「学校」または「教室」と見立てて考える事により、いくつかの具体策が見えてく るのではないかという発想である。学校教育には、規律正しい生活・人間関係の育成・目標を持った学習活動など明 確な目標があるように、地域社会に応用する際には住民に分かりやすい目標を設定することが大切となる。行政の担 当部署が学校現場のノウハウを共有出来るといった、新しいタイプの連携を構築することも必要だろう。

【日本人側の課題】

前項では、日本社会が「外国人を受け入れる覚悟をしていない」という外国人の意見を紹介したが、ここでは視点を変えて「日本人自身が日本を理解しようとしていないのではないか」という問題について述べたい。

学校で外国人の担当をしていると、他の教員から「一日中外国人と接してまるで外国に居る気分でしょう」と言われることがある。実はこれが全く反対で、「自分が日本人であることを思い知る日々」の連続だった。日本語を知らない子どもに日本語を教える場面を想像して欲しい。「何故ひらがなと漢字を使い分けるのか」「なぜ縦書きなのか」と聞かれたら、多くの日本人は瞬時に答えることができるだろうか。さらに、「文字を書く時は紙を真っ直ぐ置く」「書く時は姿勢を正す」など、当たり前の事も納得させなければ先に進めないのだ。私はひらがなの成り立ちや、昔は筆で書いていたことなどを説明し、続いて筆ペンを持たせ「横書き」と「縦書き」でひらがなを書かせてみる・・・筆ペンの方が縦書きで書きやすいと気付くと生徒はニッコリ笑う。それからは意欲的に学習に取り組む、という感じである。外国人生徒から毎日「なぜ」と聞かれる度に、私は日本文化の奥深さやそれを説明する役割を担うことの意義を感じていた。そしてそれは恥ずかしながら、日本人として生まれて以来、初めて感じる種類の楽しさだった。

昨年3月に調査出張でブラジルを訪れていたときの事、宿泊先で Facebook を開くと、日本に住む 25歳になるブラジル人の教え子から、「先生、桜が咲いたよ」と、咲き始めた桜の下で撮った彼の画像が送られていた。日本に住むブラジル人がブラジルにいる日本人に、「桜が咲いた」喜びを知らせるという不思議な感覚を楽しむと同時に、日本に長く暮らす彼の心には「季節を感じ愛でる」という日本特有の感覚が育っていることが嬉しかった。それ以外にも、中学時代には色々あって大変だった南米系の女子生徒たちが、数年後に「成人式に着物が着たいが親に聞いてもわからない」「レンタルの仕方や式への臨み方を教えて」と連絡してくるなど、興味深い事例を多く経験している。

ブラジル人やペルー人の保護者団体が、子どものための「母語保持教室」を開設し、その活動を自治体が後押ししているという例もある。教室にお邪魔しインタビューすると、保護者はみんな子どもの教育に熱心であり、子どもたちは積極的に「日本語も」習得しようとする意欲が伺えた。私は中学校勤務時に、「日本語習得後も母語を大切にしようとする」生徒のほうが、そうでない生徒より学習活動に熱心で高校に進学する子が多かったことを思い出した。

以上のことから、我々が異文化を受入れ社会統合を考える際は、先ず日本人が日本という国や文化(アイデンティティを含む)を再認識する作業が必要であることに気付くだろう。<u>国際理解は、国や集団同士で行うのではなく、「人対人」すなわち「異なるアイデンティティ同士」で深めあうもの</u>というのが現場経験を通しての持論である。我々日本人は大人も子どもも目先の快適さばかり追い求めず、自分たちの文化を見つめ直す必要がある。「多文化共生」という言葉に対し賛否両論が聞かれる中、「日本特有の多文化共生」の実現のために、それは決して遠回りの選択では無い。

【最後に】

話を学校現場に戻そう。これまでの文章で、学校現場における取り組みの中には、地域社会における社会統合に生かせるヒントが隠れていることについて触れた。しかし学校現場においても、「学習言語の習得」「学習評価」「高校入試制度」など、多くの課題が山積みであることに変わりない。その最も大きな原因を挙げるなら、「教員の意識がなかなか変わらないこと」に尽きる。いま、日本の子どもの「学習に対するマニュアル化」が問題視され始めているが、これは教員世界にも当てはまり、「自らが目の前の課題に気付きそれを切り拓こう」という意識の乏しい教員が少なくない。特に言いたいことは、「外国人など少数派を支援する教員の姿勢は、子ども全体に対する大切なメッセージになる」と言うことだ。クラスに日本語が話せない児童が入った時、学級担任がその子に真摯に向き合う姿は、周囲の子どもに「異なるもの」「少数派」との向き合いかたを無言のうちに教育していることになる。反対に、担任が支援をあきらめて外国人が不登校になるもしくは退学した場合、「異なるものは失敗する」「自分も少数派にはなりたくない」という、恐ろしい価値観を教育してしまうことになる。このような「負の価値観」は知らずのうちに社会に浸透し、「外国人との社会統合」以前に、日本人の資質の荒廃につながると恐れてやまない。このような危惧は私が長年の中学校勤務を通し肌で感じたものであり、我々は「教育」の大切さを未来への危機感と共に再認識しなければならない。

Marian Jocelyn R. TIROL-IGNACIO, Minister and Consul-General, the Embassy of the Philippines in Japan

INTERNATIONAL WORKSHOP ON ACCEPTANCE OF FOREIGN NATIONALS AND THEIR INTEGRATION INTO JAPAN – HUMAN RESOURCE DEVELOPMENT OF YOUNG FOREIGN NATIONALS FOR THE NEXT GENERATION

The Philippine Migrant Youth

- a. Statistics
- Filipinos comprise 10% of all foreign nationals living in Japan and are its third largest population of foreign nationals. According to MOJ, as of December 2012, there are 208,696 Filipinos in Japan. Of this number, 202,974 (97.26%) Filipinos have valid Japanese visas while 5,722 (2.74%) are irregular migrants.
- More than half (106,443 or 51%) of all Filipinos in Japan are permanent migrants. Most Filipino permanent migrants (36, 769) are spouses, dependents or relatives of Japanese nationals or permanent visa holders. Together with temporary migrants, that consist mostly of spouses and children of Japanese nationals and long term visa holders, Filipinas with foreign spouses and their dependents constitute the largest number of Filipinos residing in Japan today.
- There are 40,961 registered Filipino youth (24 years old and below) in Japan. They comprise ¼ of the total number of registered Filipinos living in Japan. The 10 to 19 year olds number 14,838 out of total of 27,496 Filipinos aged 19 years old and below. Filipinos aged 20-24 years are 13,195. Of these Filipino youth below 25 years old, 19,529 are male and 21,162 are female.
- According to the 2013 White Paper on Crime, of the number of visiting foreign national juvenile offenders referred in 2011 by nationality, those from the Philippines were the largest in number at 222 (24.4%), followed by Brazil at 171 (18.8%), China (including Hong Kong (but limited to those with a passport issued by the Chinese government) and Taiwan) at 157 (17.3%), South/North Korea at 79 (9.5%), Peru at 77 (8.5%), and Vietnam at 44 (4.8%). By type of offense, theft was the largest in number at 489 (53.9%), followed by embezzlement (including embezzlement of lost property, etc.) at 144 (15.9%), injury at 89 (9.8%), breaking and entering at 31 (3.4%), and Violation of Immigration Control Act at 21 (2.3%).
- The number of foreign national juvenile offenders on probation (excluding those placed under short-term probation for traffic offenses) and juvenile training school parolees newly placed under probation/parole supervision in 2011 was 338 (252 juveniles probationers, 86 juvenile training school parolees), down 14.4% from the previous year. By nationality, those from Brazil were the largest in number at 87, followed by Korea / North Korea at 79, the Philippines at 49, China at 48, and Peru at 26. Treatment courses available at juvenile training schools include the living guidance course established in 1993 to cope with the increasing number of foreign national juveniles needing to be accommodated in juvenile training schools. Foreign national juveniles who require different treatment from Japanese juveniles avail of the living guidance course and are provided guidance on Japanese language acquisition and information on living in Japan depending upon whether they will remain in country after being discharged.

Response

b. Initiatives

• CFO Peer Counseling Program

As a Filipino emigrant, or those who have been granted an immigrant-class visa, are required by the Philippine Government by virtue of Article 19 of Presidential Decree No. 442, to register with the Commission on Filipinos Overseas (CFO) before leaving the country to settle in a foreign land. Registration to the CFO requires the emigrant to attend a Pre-departure Orientation Seminar (PDOS) or the Peer Counseling Seminar. The PDOS is a brief, two-hour seminar on settlement issues and concerns such as finding employment, rights and obligations of immigrants as well as policies and procedures on how to secure foreign citizenship. The Peer Counseling Seminar is a special session, for those with ages 13 to 19 years, which aims to prepare them emotionally for the adjustments they will have to take. Children 12 years old and below are exempted from attending the PDOS. The Commission on Filipinos Overseas (CFO) was established on 16 June 1980 through Batas Pambansa 79. It is an agency of the Philippine Government under the Office of the President tasked to promote and uphold the interests of Filipino emigrants and permanent residents abroad, and to preserve and strengthen ties with Filipino communities overseas.

Centro Rizal

R.A. 10066 also known as The Heritage Law envisions the setting up of a Centro Rizal in the various Philippine Embassies around the world. It addresses 2nd generation Filipinos who grew up overseas and lack awareness of their Filipino heritage. There are plans to implement this in Tokyo.

• Youth Problems as a Mental Health Concern

Several identified mental health issues are youth-based, specifically the (1) problems of the youth (such as identity, including gender identity, cultural and language problems) where they feel stigmatized. A Consultation Meeting on Promotion of Mental Health Awareness was held at the Philippine Embassy in Tokyo on 10 October 2013. It discussed mental health concerns and challenges faced by Filipino migrants in Japan through the lens of caseworkers and mental health practitioners. Several constraints were identified when dealing with the issue: (1) lack of resources and financial difficulties; (2) juvenile delinquency among children and youth who are not provided adequate parenting (as they are frequently referred for medical or psychiatric help). A major challenge is the lack of knowledge of this mental health issue and ignorance. For early detection and response of this problem, it was recommended that there be special interventions for youth such as a research survey on youth; (3) unprepared or poor parenting which are further exacerbated by cultural and language barriers within the family (usually between husband and wife) and within the community, and the inability to fully integrate. In this regard, it was deemed important that an inventory of successful interventions be made and documented.

• Filipino Community Concerns

Many members of the Filipino community organizations are aging (with registered Filipinos aged 35 years and older numbering 109,983). Meanwhile, their children and what is generally considered the second generation, are also growing older. Some of the children are born of solely of Filipino parents. However, most are Filipino citizens with Japanese fathers and Filipina mothers. Many Filipino parents have expressed growing concern over the successful integration of their children into Japanese society even as they desire their children to retain Filipino values, their religion, their native language. Concerns may range from early marriages and the inability to obtain a college education to joining gangs and engaging in crime. Tahanan ni Nanay aka TNN (Mother's House) is an example of a volunteer organization set up to provide a refuge and temporary shelter for distressed Filipino nationals, and more specifically the youth. It has launched a youth empowerment education program which caters to children of all ages and provides individual counseling to Filipino youth.

平成25年度「外国人の受入れと社会統合のための国際ワークショップ」

若手外国人とともに歩む~次世代に向けた挑戦~

アルベルト松本

- 近年だけではなくいつの時代も国内で確保できないまたは国内であまり育てること のできない高度な人材は、どの国も海外から調達してきた。留学生や専門家の受け入 れ、そして自国の有能な人材の海外留学または派遣も産業のイノベーションや、社会 の視野を広くするためには有効な手段である。
- 世界には約400万人の若者が外国の大学や大学院に留学しており、高度な知識を身につけながらその能力を競争力の激しい労働市場に提供する。非常に流動的な人材で、日本の人事考課や労務管理にあまりうまくマッチングしないことも否定できない。しかし、企業や自治体、教育機関も今や「グローバル人材」を必要としている。
- 多くの国では、留学生だけではなく移民の子弟を活用することによって上手にこうした人材を発掘している。アメリカでもドイツでも、そして移民で国づくりをした南米では多様な人材が移民の子弟である。さまざまな国や文化圏の出身者であるため、言葉だけではなくその考え方やネットワークが大きな資産である。
- 日本にもそう多くはなくともそうした人材は存在し、その可能性をもっと活用すべきである。日本の教育機関で義務教育をきちんと受けるようにすることはもちろんのことだが、その異なった文化的・社会的背景を把握しながら、教育現場では単なる表面的な国際教室ではなく、もっと積極的にその違いや多様性を学ぶ機会を設ける必要がある。日本側にもプラスになるような工夫も必要だが、摩擦や対立をマネジメントすることが国際的な人材育成の基本であることを忘れてはならない。
- 日本に定住化しつつある外国人子弟の中にはドロップアウトしたり、義務教育を終えても高校や大学に進学しないケースもある。一部の外国人集住都市では青少年の非行や不就学問題があるが、しかし多くの地域や都道府県では同じ国籍、来日時期、経緯、就労環境にいながらもかなりスムーズに社会に統合している。そして、その地域に必要な人材も生まれようとしている。帰化して地方公務員になったり、大学院にまで進んで海外留学後日本の優良企業に就職している若者も出てきている。
- 「地域内のグローバル人材」というのは決してみんなが有名大学に進学し高い学位を取得し、複数の言語を操れるわけではない。日本で生まれ育った外国人子弟もいれば幼少期に来日して日本で教育を受けたものもいるが、その親も出身国でかなり高い学歴と経歴をもっていれば、日本語が完璧でなくとも、日本の行政や国際交流協会、学校等でそれなりの役割を担うことができる。

- 外国人の社会統合は、日本の社会に溶込み権利と義務を履行し、信頼を得ることであるが、受け入れ社会にとっては諸外国のさまざまな側面を直に知ることでもあるがため、結局日本をもっと精神的に鍛え社会的にも豊かにすることである。他方、互いに理解を深めることは日本の長所をもっと伸ばす結果につながる。日本自身の次世代育成及び日本が必要としているグローバル人材育成にも少なからず貢献できる要素なのである。
- キーワードは日本側が多様性(近年、ダイバーシティーという概念を使用する人が多いのだが)というものを恐れないことであるが、外国人から見ると日本や日本人の多様性を理解することも大きな挑戦である。多くのことに魅了されながらも、そのことを知るためには日本人と共でなければ困難なものもたくさんあるのだ。だからこそ双方の興味や利害関係を微妙にマッチングさせないと時にはプラスと認識できないことも多いかもしれない。
- 多様性をもった人材を育成することは、競争が激化している国際ビジネスや複雑な 政治状況に対応するためでもあるが、国内の産業構造の変化や来日外国人観光客等に 対応することにも期待できる。今この日本に存在する外国人子弟の育成と活用は、近 い将来重要な「人的資源」になるに違いない。
- ここ1年、日本政府は海外の日系人を日系企業の海外進出や諸外国との架け橋として政治レベルでも認識するようになり、アメリカ合衆国をはじめ中南米の日系有力者の存在意義を重要視している。それと平行して、日本の良き理解者としてまた諸外国との繋ぎ役として日本で育成できる次世代の若手外国人にはその役割を理解し、自覚してもらうだけでも大きな励みになり社会的にも飛躍できる絶好のチャンスである。

(株式会社ローソン理事執行役員、ヒューマンリソースステーションディレクター補佐)

IT の革新的な進化が全世界に席巻し、目まぐるしい変化が日々起きているなか、時代の変化を先取りし、対応するため、常にイノベーションを起こし続ける組織作りが重要であり、ダイバーシティマネジメントを今まで以上の推進が必須となります。

コンピューターが発明され、インターネットの出現により、ベンチャー企業が新しいスタンダードを創り、新たな価値提供企業として、グローバルレベルで成長を遂げます。 世界は大きく変動します。今後もビジネスモデルの新陳代謝がさらに飛躍的に進むでしょう。10年後、20年後、きっと想像に絶する世界になっているはずです。

企業にとっては、「変化」にいかに対応できるかは成長シナリオを描き、進化するための大きなポイントとなります。そのなか、多様性を認め、活かすことが大事であり、ダイバーシティマネジメントが必要であると考えています。

つまり、多様性が統合された組織作りが重要です。ローソンは、様々なバックグランドや 価値観を持つ人々がお互いの考えを認め、そしてそこから新たな発見をし、価値を生み出 していくのを実現することを目指しております。

ダイバーシティの観点から、2008 年から、新卒社員の $20\%\sim30\%$ は外国人留学生を採用してきています。入社実績は約 150 名で、出身国は 11 カ国にのぼります。

外国人社員が始めて配属された際に、社内では戸惑いがありましたが、いまでは外国人と 一緒に仕事することは当たり前になり、多様な価値観を受容ができる環境が整えつつあり ます。

外国人社員との会話を通し、これまで常識と思っていたことが見方を変えればそうではないことに気づくことが多々あり、これこそが多様性による価値だと感じることが多々あります。それが年々多くなってきています。

現在では、マーケティング、商品開発、経営戦略、物流、IT ステーション、建設、海外事業、スーパーバイザー(店舗経営指導員)など、多岐にわたるフィールドで、外国人社員が活躍しています。

今後は、さらに外国人社員に力を発揮してもらうために、特に中間管理職のダイバーシティマネジメントの能力を強化し進めていきたく考えております。

平成25年度国際ワークショップ会場配布資料 愛知淑徳大学准教授 小島 祥美

朝日新聞2013年12月14日岐阜県版

地域に生かすよ 若者のアイデア

御嵩町の県立東濃高校が35日、愛知溆徳大 の教員らとともに進めたキャリア教育のプロ ジェクトの発表会を開いた。東濃高の1年生 104人がひグループに分かれ、地元NPO などが抱える課題の解決策を考えたり、町内 の企業見学で知った仕事の魅力を発表したり Jr.



工

生

卅

個

丰辰

東

このプロジェクトは「東農 性化プロジェクトー。愛知敏 徳大の小島 従美・ 文学 郭 惟 数 授 (多文化共生論) によるキ **トリア教育の一環で、「自分** たちが町で役に立てる存在だ と自信を持ってほしい」と始 あれれてい。

生徒らは江月下旬から町内 4企業を見学し、 社長らから 仕事の魅力を聞いた。また、 「外国人も利用しやすいコン どこし や「ケーブル・プンビア 児の高校生ファンを増やす」 などをテーマにアイデアを出 し合ってきた。

この日は、すべてのグルー プが発表し、コンビニに外国 のお菓子を置いたり、託児所 を作ったりするなどの意見を 出した。初めて人前で発表す るという生徒が多かったが、 ゲストとして招かれた見学先 企業やNPO関係者らからは 大きな拍手が送られていた。

東濃高は外国籍の生徒が全 校の約2割を占める。ブラジ ル出身のモラエス・ミカエラ さん(फ)は「コンビニの店長 さんと話し、外国人客のこと をよく考えているんだなどう れしくなった。学んだことを 将来にいかしたい」と笑顔で 肝した。 (女厂配)

復 廽 級 生の 母

松阪市久保中学校の生徒が台風30号の被災

めた。生徒会長の二年市野巧大君へミがテレ 地・フィリピンの早期復興を願って募金活動 少しでも役立てば」と話している。(吉野淳一) ビで惨状を知って呼び掛けた。市野君は「こ に取り組み、義援金六万三千百六十五円を集 んなに集まるとはびっくり。被災地の復興に

の支援を相談した。久保 間の不幸を人ごとにした 生徒もいる。市野君は「仲 中には同国出身の生徒が 担任教諭にフィリピンへ 十一月十八日、市野君は くない。少しでもできる 動した思いを語る。 二十三人通い、現地の友 ことをしたかった」と行 心と連絡が取れていない 台風上陸から十日後の 生徒会六人で支援策を を通じて、現地に義援金 協力を申し出た。国際ク 二十五人も計画を知り、 徒らが日本語を学ぶ部活 施を決めた。外国籍の生 話し合い、募金活動の実 を届けることにした。 ピンのミンダナオ国際大 ラブと交流のあるフィリ 一一二十七日の毎朝、 生徒たちは十一月二十 「国際クラブ」の生徒

の生徒が小遣いを入れて 託された義援金を持参 力を呼び掛けると、多くり、保護者や祖父母から 作りの募金箱を抱えて協 くれた。支援の輪は広が 遣ってくれる気持ちがう れしかった」と目を細め ラブの部長で、 する生徒もいた。国際ク (一旦は「私たちの国を気 ・アップルジーンさん ン国籍の三年バーカルソ フィリピ

ん、生徒会副会長の一 西玲那さん(一旦は六日、 御手洗美空さん(四)、 送る。市野君ら四人は 同市殿町の市教委事務局 えていきたい」と力強く 義援金を寄託した。 に東博武教育長を訪ね、 イリピン生まれの三年大 できるのか、支援策を考 安はミンダナオ国際大に 今後も自分たちに何が 市野君とバーカルソさ

語った。

を集めた久保中の市野巧 殿町の市教委事務局で フィリピンに送る義援金 大君(左端)ら=松阪市

- 90 -

岐阜県人ブラジル移民100周年記念

講演会×対談×ドキュメンタリー映画から 「みらい」を考えよう。

1913年3月30日、岐阜県人のブラジル移民がはじまりました。この100年間に、どんな歩みがあったのでしょう。

岐阜新聞で特集連載を担当した記者による特別講演、今を生きる日系ブラジル人の若者との公開対談を行います。また、岐阜に暮らす日系ブラジル人・カイオくん家庭を追ったドキュメンタリー映画の上映会も行います。

講演会、公開対談、映像を通じて、一緒に「みらい」を考えましょう。



2014年3月2日(日)

会場:ハートフルスクエア(()R岐阜駅すぐ/構内から連絡通路あり)

13:10-受付開始(先着70名/事前予約者優先)、16:45 終了予定

13:30- 第1部 参加費無料/逐語・ポルトガル語通訳あり

[特別講演] 岐阜からブラジル移民100周年・特集連載 「ジャポネス・ガランチード (日本人は信用できる) 」を担当して 岐阜新聞 記者 馬田 泰州さん

14:20- 公開対談

日系ブラジル人の若者×映画主人公の青年×馬田記者 アマンダ ジメネス シゲイさん 横溝 クリスティーナ 小百合さん アラマキ カイオ イオシカネさん 馬田 泰州さん

進行/小島 祥美さん (愛知淑徳大学准教授)

る問題

15:15- 第2部 参加費1,000円(特製冊子付き)

進行/渡辺 マルセロさん

ドキュメンタリー映画 **「ブラジル ノ ニッポン**」上映会

岐阜で初上映! *日本語・ポルトガル語の字幕あり

主催 NPO法人MixedRoots×ユース×ネット★こんぺいとう

共催 科研費若手研究B「定住外国人の子どもに対するキャリア教育の在り方に関する研究」

協力 岐阜県国際戦略推進課

●○お問い合わせ・事前申込先○●

NPO法人MixedRoots×ユース×ネット★こんぺいとう(事務局)

⇒http://youth-conpeitou.blogspot.jp/

E-mail: youth.conpeitou@gmail.com Fax: 0574-28-1900

EVENTO EM COMEMORAÇÃO AOS 100 DE IMIGRAÇÃO DOS MORADORES DE GIFU PARA O BRASIL

PALESTRA × DEBATE × FILME DOCUMENTÁRIO **TEMA: VAMOS PENSAR NO "FUTURO"**

REALIZAREMOS UM DEBATE ABERTO COM O CONVIDADO O JORNALISTA DO JORNAL GIFU SHINBUN QUE DURANTE 6 MESES ESCREVEU UMA MATÉRIA SOBRE A IMIGRAÇÃO, E OS JOVENS BRASILEIROS DESCENDENTES DE JAPONESES.

DEPOIS DISSO, VAMOS EXIBIR O DOCUMENTÁRIO SOBRE UMA FAMÍLIA BRASILEIRA DESCENDENTE DE JAPONESES QUE VIVE EM GIFU. APÓS A EXIBIÇÃO, DISCUTIREMOS SOBRE O FUTURO EM CONJUNTO.

Data: 2 de Março de 2014

LOCAL: HEARTFUL SQUARE G (AO LADO DA ESTAÇÃO JR GIFU)

RECEPÇÃO: INÍCIO ÀS 13:10 HORAS (VAGAS LIMITADAS PARA 70 PESSOAS POR ORDEM DE CHEGADA / PRIORIDADE PARA QUEM TIVER RESERVA)

TÉRMINO: ÀS 16:45 HORAS

PRIMEIRA PARTE: ÀS 13:30 HORAS PARTICIPAÇÃO GRATUITA (com intérprete em português)

PALESTRA

COMEMORAÇÃO AOS 100 DE IMIGRAÇÃO DOS MORADORES DE GIFU PARA O BRASIL UMADA Taishu

JORNALISTA DO JORNAL GIFU SHINBUN, RESPONSÁVEL PELA SÉRIE ESPECIAL "JAPONÊS GARANTIDO"

DEBATE ABERTO: ÀS 14:20 HORAS

JORNALISTA UMADA × JOVENS BRASILEIROS DESCENDENTES DE JAPONESES × O PROTAGONISTA DO FILME

SEGUNDA PARTE: ÀS 15:15 HORAS TAXA DE PARTICIPAÇÃO: 1,000 IENES

(COM DIREITO A RECEBER UM LIVRETO ESPECIAL)

FILME DOCUMENTÁRIO (BRASIL NO NIPPON)

XFILME COM LEGENDA EM JAPONÊS E PORTUGUÊS

PATROCÍNIO [PARA MAIS INFORMAÇÕES]

NPO MIXEDROOTS × YOUTH × NET * CONPEITOU

E-mail:youth.conpeitou@gmail.com Fax:0574-28-1900



資料1:公立学校に在籍している外国人児童生徒数(文部科学省「学校基本調査」より)

資料2:日本語指導が必要な外国人児童生徒が在籍する公立学校数(文部科学省「日本語指導が必要な児童生徒の受入れ状況等に関する調査(平成24年度)」より)



資料3:義務教育諸学校における日本語指導の新たな体制整備について(文部科学省「学校教育法施行規則の 一部を改正する省令等の施行について(通知)」別途資料より、平成26年1月14日)

義務教育諸学校における日本語指導の新たな体制整備について

1. 背景

- ○定住外国人の増加に加え、保護者の国際結婚の増加、日本生まれの外国人児童生徒の増加など による、日本語指導が必要な児童生徒数の増加
- ○地域による指導・支援体制のばらつき

2. 制度の概要

「特別の教育課程」による日本語指導

- ①指導内容:児童生徒が日本語で学校生活を営み、学習に取り組めるようになるための指導
- ②指導対象:小・中学校段階に在籍する日本語指導が必要な児童生徒
- ③指 導 者:日本語指導担当教員(教員免許を有する教員)及び指導補助者
- ④授業時数:年間10単位時間から280単位時間までを標準とする
- ⑤指導の形態及び場所:原則、児童生徒の在籍する学校における「取り出し」指導
- ⑥指導計画の作成及び学習評価の実施:計画及びその実績は、学校設置者に提出

3. 制度導入の効果

- ○児童生徒一人一人に応じた日本語指導計画の作成・評価の実施 → 学校教育における 日本語指導の質の向上
- ○教職員等研修会や関係者会議の実施 → 地域や学校における関係者の**意識及び指導力の向上**
- ○学校教育における「日本語指導」の体制整備 → **組織的・継続的な支援の実現**

4. 支援体制

国の主な施策

- ・各自治体の取組を支援する補助事業の実施 (公立学校における帰国・外国人児童生徒に対するきめ細かな支援事業:平成26年度予算(案)98百万円)
- ・日本語指導を含む個別の課題解決のための加配措置
- ・独立行政法人教員研修センターにおける実践的な研修
- ・各地域、学校での取組を支援するため、
 - ①「外国人児童生徒受入れの手引き」の作成・配布
 - ②情報検索サイト「かすたねっと」の開設・運営
 - ③日本語能力測定方法の開発
 - ④外国人児童生徒教育マニュアルの開発 の実施

▼大援者

- 専門的な日本語指導
- 母語による支援
- ・課外での指導・支援

5. 今後の見通し

- ○平成26年4月1日施行
- ○「特別の教育課程」による日本語指導の実施状況等を調査予定(平成 26 年 5 月 1 日調査) ○担当指導主事等連絡協議会で、制度の理解と活用の促進を図る

設置者 (教育委員会 等)

- 学校への指導・助言
- 人的配置、予算措置
- ・研修の実施

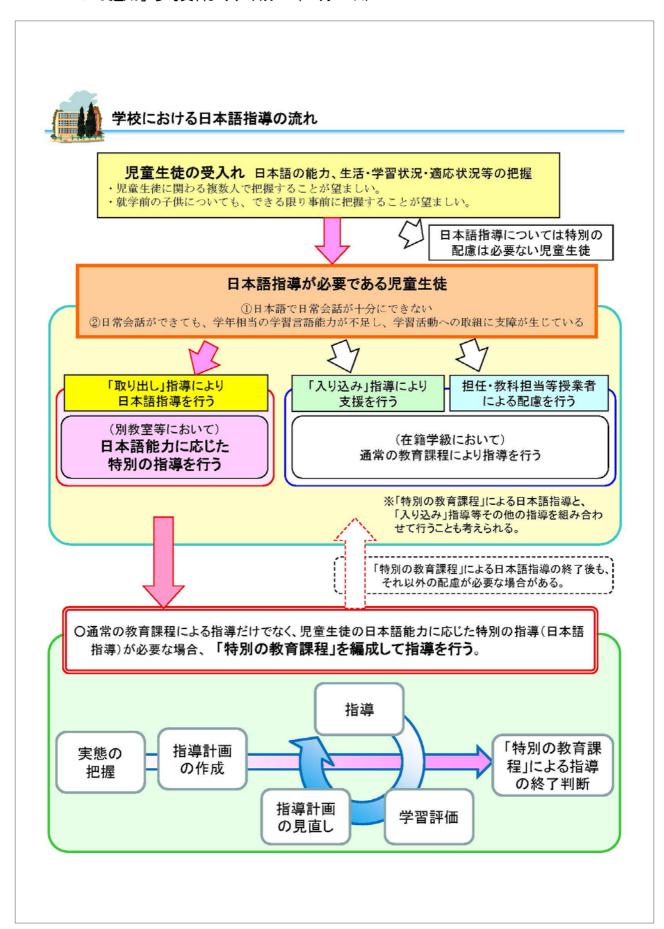
学校

- ____________ ・学校教育への位置付け
- ・指導計画の作成、指導、評価等

等

築

資料4:学校における日本語指導の流れ(文部科学省「学校教育法施行規則の一部を改正する省令等の施行について(通知)」参考資料より、平成26年1月14日)



資料5:「特別の教育課程」による日本語指導を行う場合の年間スケジュール例(文部科学省「学校教育法施行 規則の一部を改正する省令等の施行について(通知)」参考資料より、平成26年1月14日)

「特別の教育課程」による日本語指導を行う場合の年間スケジュール(例) 学校設置者 学 校 (教育委員会等) 〇校内の日本語指導に関する計画などについて、職員会議等で共通理解を図る ・指導体制(時間割等)、「特別の教育課程」を編成する児童生徒と授業時数等 4月 〇「特別の教育課程」による日本語指導 〇対象児童生徒 ※課程外の補充学習 の把握 ・教員又は指導補助者(ボランティアの活用を含む。)により、昼休み、放課後、 休業日等を活用して実施。 学校設置者への 7月 報告以降に 〇1学期の学習評価及び2学期に向けた指導計画の見直し ○児童生徒の編 ・日本語指導担当教員が指導補助者と情報交換を行いながら、定期的に学習評価を実施。 入、転出入 ○児童生徒の学 ・学習評価を踏まえ、担任と日本語指導担当教員が協力して、指導計画の見直しを行う。 習状況の変化 などにより、「特別 ※課程外の学習会 の教育課程」を編 8月 ・教員又は指導補助者(ボランティアの活用を含む。)により、夏季休業日等を活用 成する児童生徒 して実施。 について変更が 生じた場合は、各 学校で「『特別の 〇「特別の教育課程」による日本語指導 教育課程』実施報 〇指導計画の作成と見直し 告書」を随時更新 9月 ・日本語指導が必要な児童生徒の指導計画 する。 については、 ①来日直後は2週間ごとに、来日3か月目 以降は3か月ごとに作成するなどの工夫 をすること ②日本語の習得状況や学校生活への適応 12月 〇2学期の学習評価及び 状況に合わせて、3か月に1回程度は、 計画を再検討するとよい。 3学期に向けた指導計画の見直し (参考: 『外国人児童生徒受入れの手引き』) 〇 「特別の教育課程」による日本語指導 〇次年度の特別の 教育課程編成·実施 計画の確認 〇年度末の学習評価、1年間の指導体制等の見直し ※概ね年度末までに 実施 1月 〇日本語指導が必要な児童生徒について、次年度の指導計画の作成及び指導体制の ・担任と日本語指導担当教員が協力して、「特別の教育課程」による指導計画を作成。 (計画の作成等に当たり、日本語指導補助者とも十分な意見交換を実施) 〇当該年度の特別 3月 の教育課程の編成・ ○当該年度の特別の教育課程編成・実施報告書及び次年度の特別の教育課程編成・ 実施報告書の集約 実施計画を、学校設置者に届出。 ※概ね次年度の5月 までに集約

※上記例を参考に、各設置者で年間スケジュールを検討する。

IX 閉会の辞

外務省領事局長 三好真理

主催者を代表致しまして一言ご挨拶を申し上げます。

本日は皆様方お忙しい中、これほど多数の方にワークショップにお出かけいただきまして、誠にありがとうございました。また、共催者のIOM、スウィング事務局長は明日、スイス、ジュネーブの本部へお帰りになられるということでございますが、IOMの方々そして、目黒区、自治体国際化協会の方々、共催者として準備の過程、また、本日大変お世話になりましてありがとうございました。

それから、オランダからはるばる来てくださいましたアンツィンガー教授、そして、 議長を務めてくださいました山田伸二NHK解説委員、そしてパネリストの皆様、本当 にありがとうございました。

少子高齢化,人口減少が進む日本におきましては,本日お話しいただきましたお二人のような優秀な若手外国人の活力を活かして,ともに歩んでいくことが次世代に向けての大きな課題になっていると思います。

本日は、言葉とか、教育とか、地域とか、日本経済とか、色々な課題が議論されました。私はお二人のお若い方々のスピーチに非常に感銘を受けました。特に、日本でやっていこうと決めた、日本のことが好きだと言ってくださったことを非常に嬉しく思いました。と同時に、日本側でもそれを受け入れる度量と申しましょうか、日本側の心構えが必要だなとつくづく感じた次第でございます。

また、アイデンティティの話がありましたが、私は旅券課長をしていたことがありまして、2月20日は日本で初めて「旅券」という名称が入った規則ができた日でして「旅券の日」ということになっております。その機会に大相撲の小錦さんを外務省にお呼びして、外務大臣からパスポートを渡していただいたことがあったのですが、そのすぐ後に、小錦さんがある週刊誌にエッセーを寄せておられまして、実は日本国籍を取るべきかどうか、ご存じだとは思いますがハワイの出身で、アメリカ国籍から日本国籍に移ることについて非常に逡巡されて、あるときハワイにいるお母さんに相談されたと。お母さんは、日本国籍であろうとアメリカ国籍であろうと、あなたは私のかわいい息子に変わりはないんだと、後押しをしてくださったというエッセーを書いておられて、非常に印象付けられたんですけれども、やはりアイデンティティの問題というのは恐らく、その方がメンバーとしてその社会に受け入れられていると感じられるかどうかが一つ大きなポイントになるのかなということを感じた次第です。

今回の討論がきっかけとなって、外国人との共生ということについての国民的議論が、 活発になればと、主催者としては希望する次第でございます。

来年度も是非このワークショップを続けていきたいと思っておりますので, 引き続き

皆様方よろしくお願い致します。これを持って、私の挨拶と代えさせていただきます。 本日はどうもありがとうございました。

X 統計資料

平成25年度外国人の受入れと社会統合のための国際ワークショップ

若手外国人とともに歩む ~次世代に向けた挑戦~

統計資料

- 在留外国人数
- 留学生からの就職目的への在留資格変更許可人員
- 在留外国人が生活する上で困っていること

平成26年2月21日外務省領事局外国人課

目 次

•	在 【 【	留国在国	卜国	人 【格	数在別	の 留 】	推外在	移国留	人 外	数国	で]人) 护 、娄	生移	多)	(ā 住和	長 多	2 , (₹	 表	図 3	2) 図	3	•)	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	1 2
	留:	学: 学: 国第	Eカ	いら	の	就	職	目	的	^	· 0,)	E윝	習道	資料	各多	変	更	許	可	人	員	(表	5	,	図	5)	•	•	•					
) 7	生	留:	外	玉]]	\7	が	生	ΞŽ	舌	す	- 2	る.	Ŀ	_ 7	で	团		o -	T	し	١,	5	_	ع			ı	-							-	4

概 要

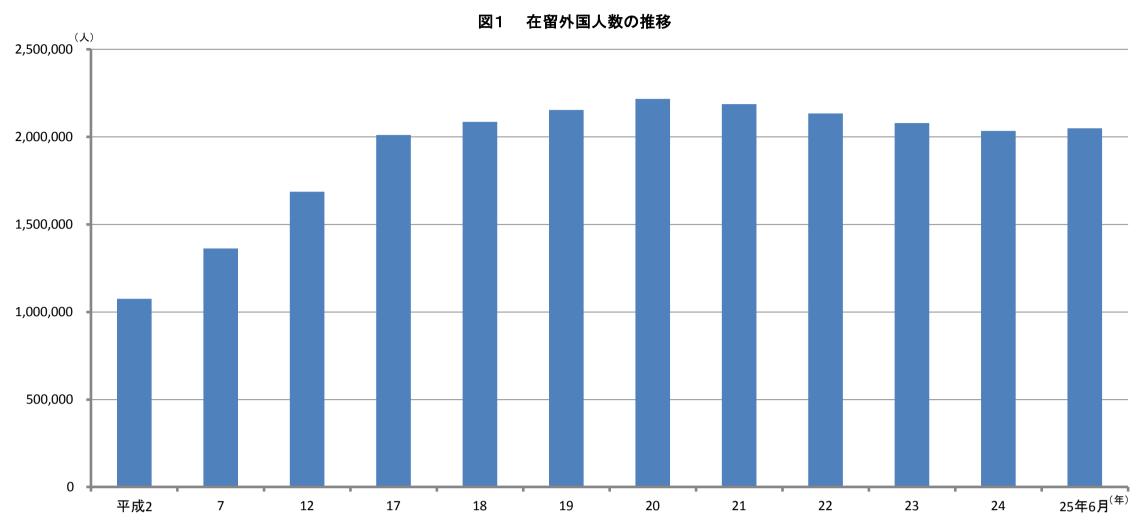
- 在留外国人数は、平成2年に初めて100万人を突破。その後、年々増加傾向にあったが、リーマンショックの影響などから平成20年の約222万人をピークに減少傾向に転じ、その後も東日本大震災の影響などから毎年約3~5万人減少。平成25年6月末時点では、前年末より若干増加。
- 国籍別在留外国人の推移を見ると、平成元年時点では、韓国・朝鮮が一番多く、次いで中国、フィリピン、ブラジルの順であったが、平成2年の入管法改正以降、中国及びブラジルの在留外国人が急増。他方、韓国・朝鮮は年々減少傾向にあり、平成19年には、中国が韓国・朝鮮を抜き、国籍別で最多となった。

平成25年6月末現在では、①中国(約68万人)、②韓国・朝鮮(約53万人)、③フィリピン(約21万人)、④ブラジル(約19万人)、⑤ベトナム(約6万人)、⑥米国(約5万人)、⑦ペルー(約5万人)の順。

- 過去10年間の留学生からの就職目的の在留資格変更許可人員は、平成15年以降、年々増加していたが、平成20年の約11、000人をピークに一旦減少に転じたが、平成23年から再び増加に転じ、平成24年には、平成20年とほぼ同数まで回復。
- 国籍・地域別での就労資格への在留資格変更許可人員は、①中国が圧倒的に多く、次いで、 ②韓国、③台湾、④ベトナムの順となっている。

表 1 在留外国人数の推移

年	平成2	7	12	17	18	19	20	21	22	23	24	25年6月
人数	1, 075, 317	1, 362, 371	1, 686, 444	2, 011, 555	2, 084, 919	2, 152, 973	2, 217, 426	2, 186, 121	2, 134, 151	2, 078, 508	2, 033, 656	2, 049, 123

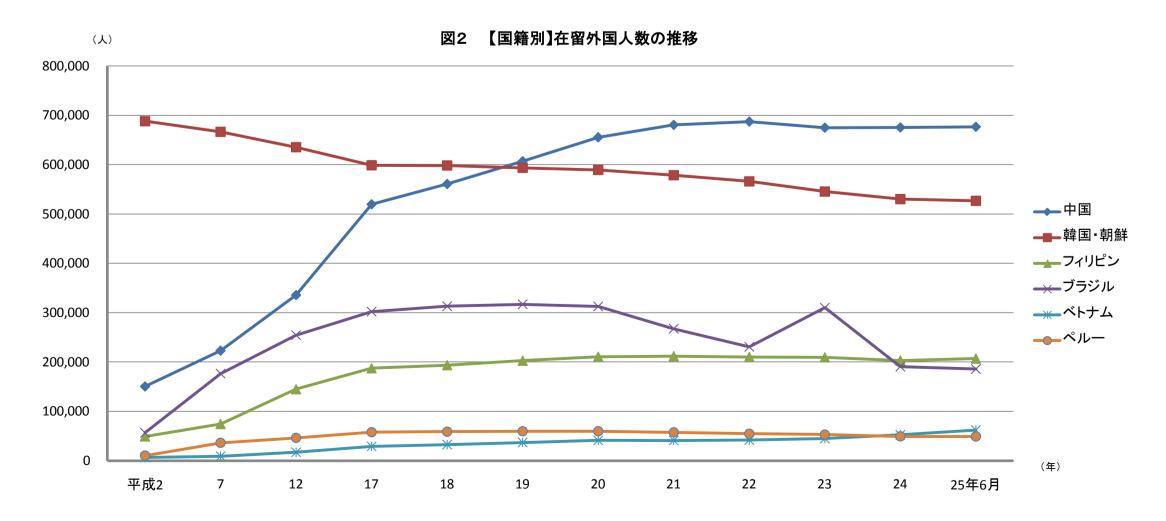


- 注) 1 「在留外国人数」は、各年12月末現在(平成25年は6月末現在)の統計である。
 - 2 平成23年までは外国人登録者数, 平成24年以降は中長期在留者に特別永住者を加えた在留外国人数である。

出典:法務省在留外国人統計より

表2 【国籍別】在留外国人数の推移

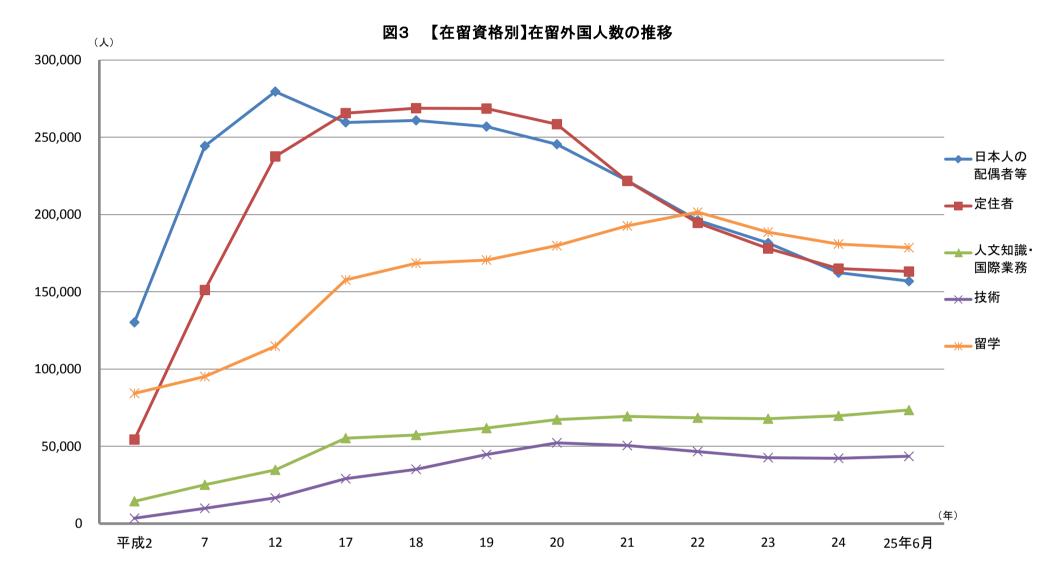
	平成2	7	12	17	18	19	20	21	22	23	24	25年6月
中国	150, 339	222, 991	335, 575	519, 561	560, 741	606, 889	655, 377	680, 518	687, 156	674, 879	675, 328	676, 696
韓国・朝鮮	687, 940	666, 376	635, 269	598, 687	598, 219	593, 489	589, 239	578, 495	565, 989	545, 401	530, 046	526, 575
フィリピン	49, 092	74, 297	144, 871	187, 261	193, 488	202, 592	210, 617	211, 716	210, 181	209, 376	202, 974	206, 769
ブラジル	56, 429	176, 440	254, 394	302, 080	312, 979	316, 967	312, 582	267, 456	230, 552	310, 032	190, 581	185, 644
ベトナム	6, 233	9, 099	16, 908	28, 932	32, 485	36, 860	41, 136	41, 000	41, 781	44, 690	52, 364	61, 920
ペルー	10, 279	36, 269	46, 171	57, 728	58, 721	59, 696	59, 723	57, 464	54, 636	52, 843	49, 248	48, 979



注)中国には、台湾を含む。

表3 【在留資格別】在留外国人数の推移

	平成2	7	12	17	18	19	20	21	22	23	24	25年6月
日本人の 配偶者等	130, 218	244, 381	279, 625	259, 656	260, 955	256, 980	245, 497	221, 923	196, 248	181, 617	162, 332	156, 857
定住者	54, 359	151, 143	237, 607	265, 639	268, 836	268, 604	258, 498	221, 771	194, 602	177, 983	165, 001	163, 092
人文知識· 国際業務	14, 426	25, 070	34, 739	55, 276	57, 323	61, 763	67, 291	69, 395	68, 467	67, 854	69, 721	73, 434
技術	3, 398	9, 882	16, 531	29, 044	35, 135	44, 684	52, 273	50, 493	46, 592	42, 634	42, 273	43, 477
留学	84, 310	95, 126	114, 761	157, 715	168, 510	170, 590	179, 827	192, 668	201, 511	188, 605	180, 919	178, 551



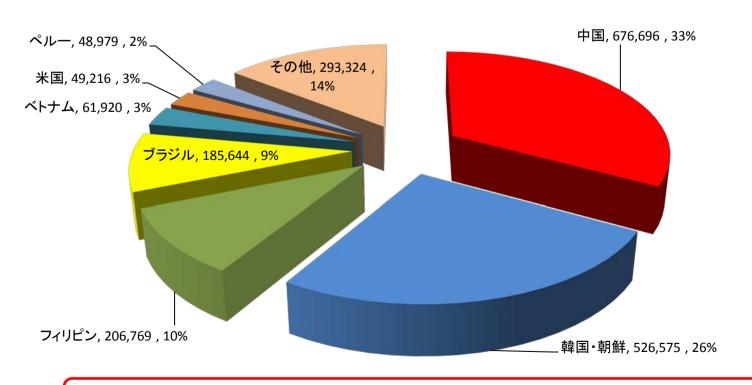
注) 平成22年以前の「留学」の在留外国人数は、「留学」及び「就学」の合計数である。

出典:法務省在留外国人統計より

表 4 【国籍別(平成25年6月末)】在留外国人数

中国	韓国 • 朝鮮	フィリピン	ブラジル	ベトナム	米国	ペルー	その他
676, 696	526, 575	206, 769	185, 644	61, 920	49, 216	48, 979	293, 324

図4 【国籍別(平成25年6月末)】在留外国人数



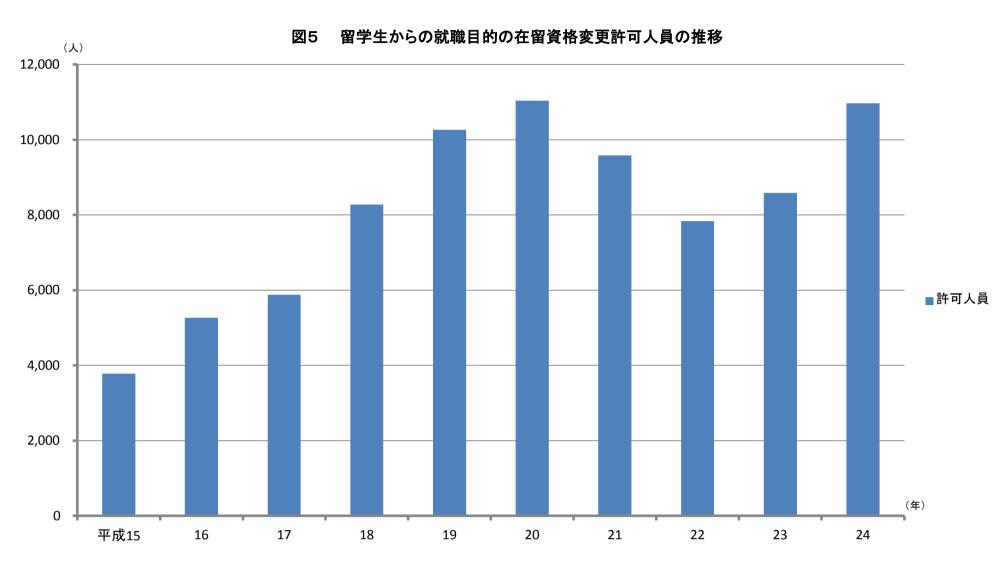
在留外国人数は, 2, 049, 123人(総人口比: 1. 61%)

注)中国には、台湾を含む。

出典:法務省在留外国人統計より

表 5 留学生からの就職目的の在留資格変更許可人員の推移

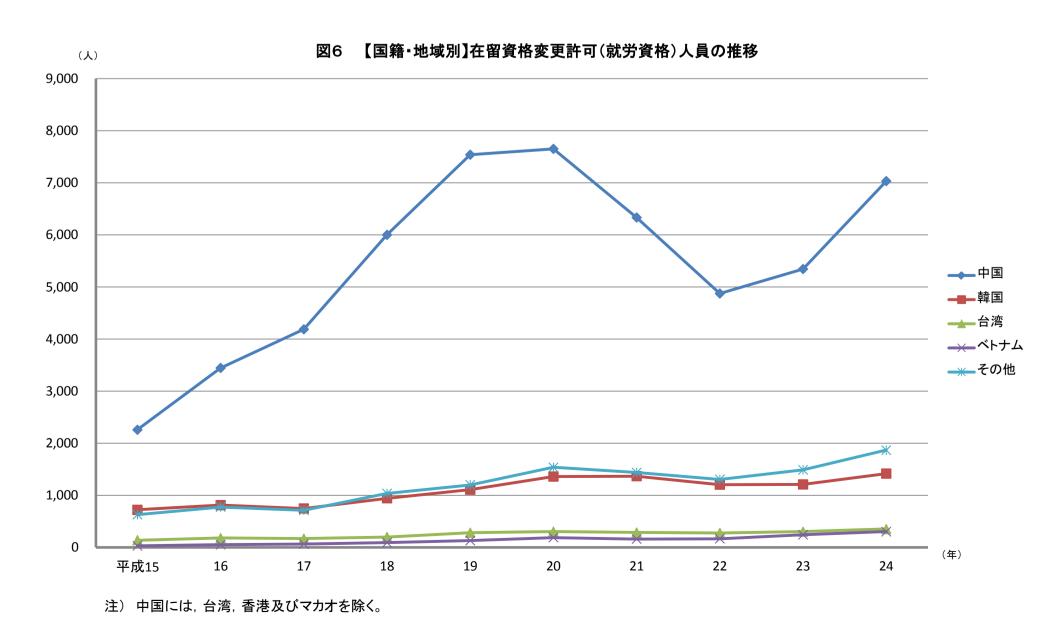
年	平成15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
許可人員	3, 778	5, 264	5, 878	8, 272	10, 262	11, 040	9, 584	7, 831	8, 586	10, 969



出典:法務省広報資料「留学生の日本企業等への就職状況について」より

表6 【国籍・地域別】在留資格変更許可(就労資格)人員の推移

	平成15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
中国	2, 258	3, 445	4, 186	6, 000	7, 539	7, 651	6, 333	4, 874	5, 344	7, 032
韓国	721	811	747	944	1, 109	1, 360	1, 368	1, 205	1, 209	1, 417
台湾	139	179	168	200	282	303	285	279	302	352
ベトナム	31	53	64	92	131	189	161	167	242	302
その他	629	776	713	1, 036	1, 201	1, 537	1, 437	1, 306	1, 489	1, 866



出典:法務省広報資料「留学生の日本企業等への就職状況について」より

在留外国人が生活する上で困っていること

- -景気悪化,物価高騰
- •日本語習得
- ·就労
- ・子どもの教育
- •住居
- 国や行政からの支援
- •税金,保険,年金
- •病院, 医療
- ・災害時, 緊急時の対応
- •情報弱者
- ・日本人からの偏見,差別

(注)本資料は平成25年に外務省職員によって地方自治体,国際交流協会,NPO等へ聞き取り調査を実施して作成したものです。

Fiscal 2013 International Workshop on Acceptance of Foreign Nationals into Japan and Social Integration

Moving on with young foreign nationals -- Challenges for the next generation --

Statistical Data

- -- The number of Registered Foreign Nationals in Japan
- -- The number of Registered Foreign Nationals Approved to acquire Working Visa to replace Student Visa

February 21, 2014
Foreign Nationals' Affairs Division, Consular Affairs Bureau, Ministry of Foreign Affairs of Japan

Table of Contents

OThe number of Registered Foreign Nationals in Japan

Trend of the number of registered foreign nationals (Table 1 and Fig.

1) - - - - - - 1

Trend of the number of registered foreign nationals by nationality (Table 2, Fig.

2) • • • • 1

Trend of the number of registered foreign nationals by status of residence (Table 3, Fig. 3) • • • • • • 2

The number of registered foreign nationals by nationality (as of the end of 2012) (Table 4, Fig. 4) • • • • • • 2

OThe number of Registered Foreign Nationals Approved to acquire Working Visa to replace Student Visa

The number of registered foreign nationals approved to acquire working visa to replace student visa (Table 5, Fig. 5) • • • • • 3

Trend of the number of registered foreign nationals approved to acquire working visa by nationally/region (Table 6, Fig. 6) • 3

Olssues related to daily living for registered foreign nationals

Overview

- The number of registered foreign nationals exceeded one million for the first time in 1990. Although the number had demonstrated an upward trend every year since then, it reversed the growing trend and started to decline mainly affected by the so-called Lehman incident, after recording the largest number at 2.22 million in 2008. Even later, as the Great East Japan Earthquake hit Japan, the number continued to decrease year by year, by approximately 30,000 to 50,000 annually. More recently, however, there was a shift in the trend and as of the end of June 2013, the number of registered foreign nationals slightly increased compared to that of the end of the previous year.
- In terms of nationality, as of 1989, among all registered foreign nationals, Korean (those from South Korea or North Korea) were the largest in number, followed by Chinese, Filipinos and Brazilians. Following the revision of the Immigration Control Act of Japan in 1990, however, Chinese and Brazilian have increased rapidly. The number of registered Korean has been decreasing year by year and in 2007, the number of registered Chinese overtook Korean and became the largest in terms of nationality.

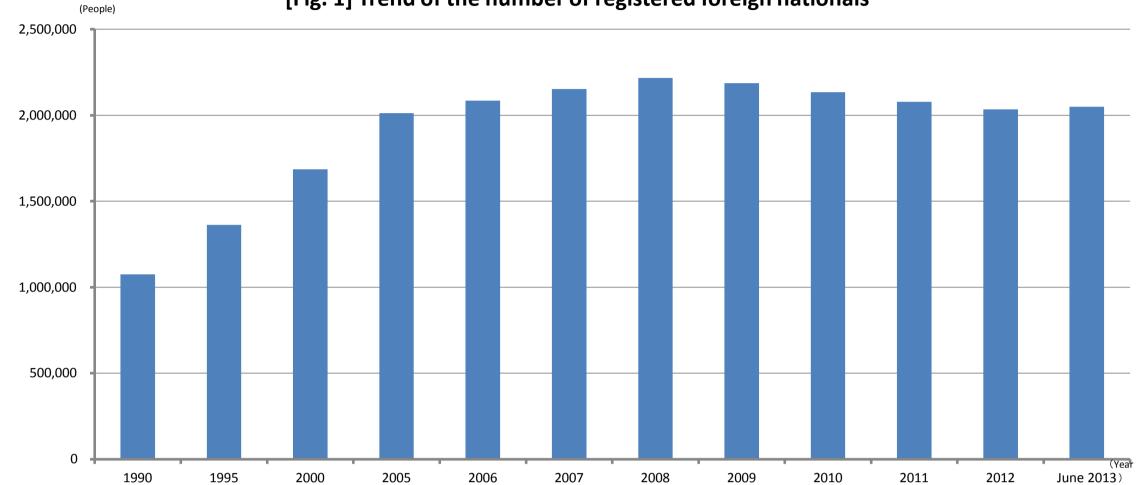
As of the end of June 2013, the ranking by nationality is as follows: Ranking No.1 is Chinese (approx. 680,000); No.2 is Korean (approx. 530,000), No.3 is Filipinos (approx. 210,000); No.4 is Brazilian (approx. 190,000); No.5 is Vietnamese (approx. 60,000); No.6 is United States (about 50,000) and; No.7 is Peruvian (about 50,000).

- From the data for the past 10 years, it is known that since 2003, the number of registered foreign nationals who obtained approval to change their status and acquire working visa replacing student visa had increased every year, until it took a downturn after peaking at approx. 11,000 in 2008. In 2011, the number again started to increase and in 2012, it recovered to almost the same level of 2008.
- In terms of nationality and region, the largest numbers of registered foreign nationals who were given approval to acquire working visa were recorded in the following ranking: No.1 was ranked predominantly by Chinese; No.2 is Korean; No.3 is Taiwanese and; No.4 is Vietnamese.

[Table 1] Trend of the number of registered foreign nationals

	1990	1995	2000	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	June 2013
Registered Foreign Nationals	1,075,317	1,362,371	1,686,444	2,011,555	2,084,919	2,152,973	2,217,426	2,186,121	2,134,151	2,078,508	2,033,656	2,049,123

[Fig. 1] Trend of the number of registered foreign nationals



Note 1) "The numbers of registered foreign nationals" above are based on data as of the end of December each year (except for data for 2013, which is as of the end of June 2013).

Note 2) Data for up to 2011 represent the numbers of registered foreign nationals and data for 2012 and later are the combined numbers of mid- and long-term residents and special permanent residents.

Source: Registered foreign nationals statistics by Ministry of Justice

[Table 2] Trend of the number of registered foreign nationals by nationality

	1990	1995	2000	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	June 2013
China	150,339	222,991	335,575	519,561	560,741	606,889	655,377	680,518	687,156	674,879	675,328	676,696
Korea	687,940	666,376	635,269	598,687	598,219	593,489	589,239	578,495	565,989	545,401	530,046	526,575
Philippines	49,092	74,297	144,871	187,261	193,488	202,592	210,617	211,716	210,181	209,376	202,974	206,769
Brazil	56,429	176,440	254,394	302,080	312,979	316,967	312,582	267,456	230,552	310,032	190,581	185,644
Vietnam	6,233	9,099	16,908	28,932	32,485	36,860	41,136	41,000	41,781	44,690	52,364	61,920
Peru	10,279	36,269	46,171	57,728	58,721	59,696	59,723	57,464	54,636	52,843	49,248	48,979

[Fig. 2] Trend of the number of registered foreign nationals by nationality (people) 800,000 700,000 600,000 _ China 500,000 **─**─草 Korea Philippines 400,000 Brazil Vietnam 300,000 Peru 200,000 100,000 0 1990 1995 2000 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011 2012 June 2013

Note) Data on China include those on Taiwan.

Source: Registered foreign nationals statistics by Ministry of Justice

[Table 3] Trend of the number of registered foreign nationals by status of residence

	1990	1995	2000	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	June 2013
Spouse or child of Japanese national	130,218	244,381	279,625	259,656	260,955	256,980	245,497	221,923	196,248	181,617	162,332	156,857
Long-term resident	54,359	151,143	237,607	265,639	268,836	268,604	258,498	221,771	194,602	177,983	165,001	163,092
Specialist in humanities/inte rnational services	14,426	25,070	34,739	55,276	57,323	61,763	67,291	69,395	68,467	67,854	69,721	73,434
Engineer	3,398	9,882	16,531	29,044	35,135	44,684	52,273	50,493	46,592	42,634	42,273	43,477
College Student	84,310	95,126	114,761	157,715	168,510	170,590	179,827	192,668	201,511	188,605	180,919	178,551

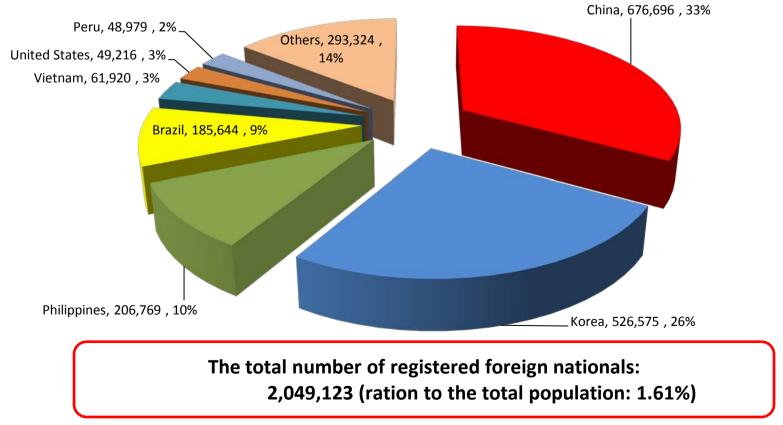
[Fig. 3] Trend of the number of registered foreign residents by status of residence (People) 300,000 250,000 → Spouse or child of Japanese national **─**Long-term 200,000 resident → Specialist in humanities/internati onal services 150,000 Engineer College student 100,000 50,000 0 1990 2004 2006 2007 2008 1995 2000 2005 2003 2005 2009 June (Year) 2013

Note) Data on registered foreign nationals with the status of college student for earlier than 2010 are total numbers of those who had the status of college student and precollege student.

[Table 4] The number of registered foreign nationals by nationality (as of the end of June 2013)

China	Korea	Philippines	Brazil	Vietnam	United States	Peru	Others
676,696	526,575	206,769	185,644	61,920	49,216	48,979	293,324

[Fig. 4] The number of registered foreign nationals by nationality (as of the end of June 2013)



Note: Data on China include those on Taiwan.

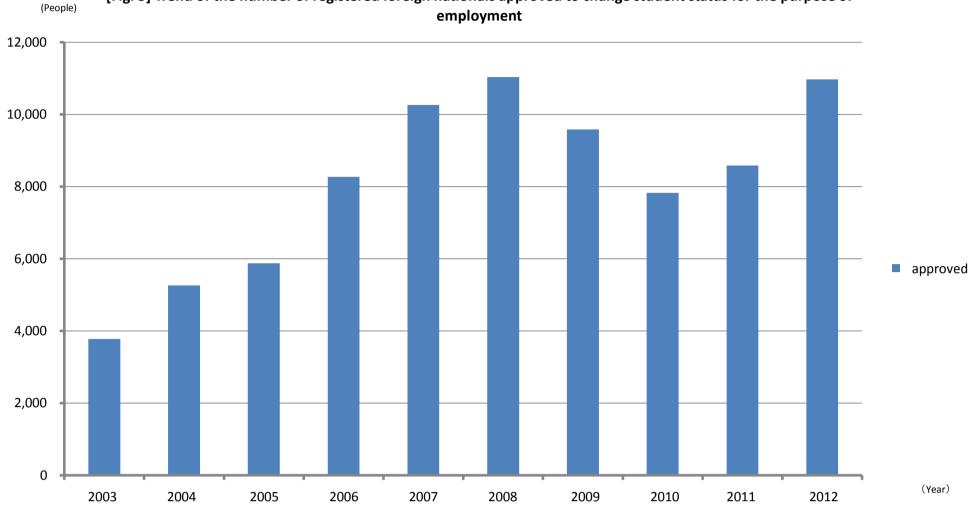
Source: Registered Foreign nationals statistics by Ministry of Justice

Source: Registered foreign nationals statistics by Ministry of Justice

[Table 5] Trend of the number of registered foreign nationals approved to change student status for the purpose of employment

	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012
The number of people approved	3,778	5,264	5,878	8,272	10,262	11,040	9,584	7,831	8,586	10,969

[Fig. 5] Trend of the number of registered foreign nationals approved to change student status for the purpose of



Source: Publicity material, "the status of foreign students' employment at Japanese companies" issued by Ministry of Justice

[Table 6] Trend of the number of registered foreign nationals approved to acquire working visa by nationality/region

	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012
China	2,258	3,445	4,186	6,000	7,539	7,651	6,333	4,874	5,344	7,032
Korea	721	811	747	944	1,109	1,360	1,368	1,205	1,209	1,417
Taiwan	139	179	168	200	282	303	285	279	302	352
Vietnam	31	53	64	92	131	189	161	167	242	302
Others	629	776	713	1,036	1,201	1,537	1,437	1,306	1,489	1,866

[Fig. 6] Trend of the number of registered foreign nationals approved to acquire working visa by nationally/region (People) 9,000 8,000 7,000 6,000 China 5,000 4,000 × Vietnam _____- Others 3,000 2,000 1,000 0 (Year) 2012 2003 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010 2011

Note) Data on China does not include those on Taiwan, Hong Kong and Macau.

Source: Based on publicity material "The status of registered foreign national students' employment at Japanese companies," by Ministry of Justice.

Issues related to daily living for registered foreign nationals

- -- Deteriorating economy and soaring prices
- -- Acquisition of Japanese proficiency
- -- Getting employed
- -- Children's education
- -- Housing
- -- Support of the National and local governments
- -- Tax, insurance and pension
- -- Hospital and medical service
- -- Disaster and emergency responses
- -- The informationally deprived
- -- Prejudice and discrimination from Japanese people

Note) The above is based on hearing surveys made to local governments, international exchange associations and NPOs by officials of the Ministry of Foreign affairs in 2013.

外務省領事局外国人課

〒100-8919 東京都千代田区霞が関 2-2-1